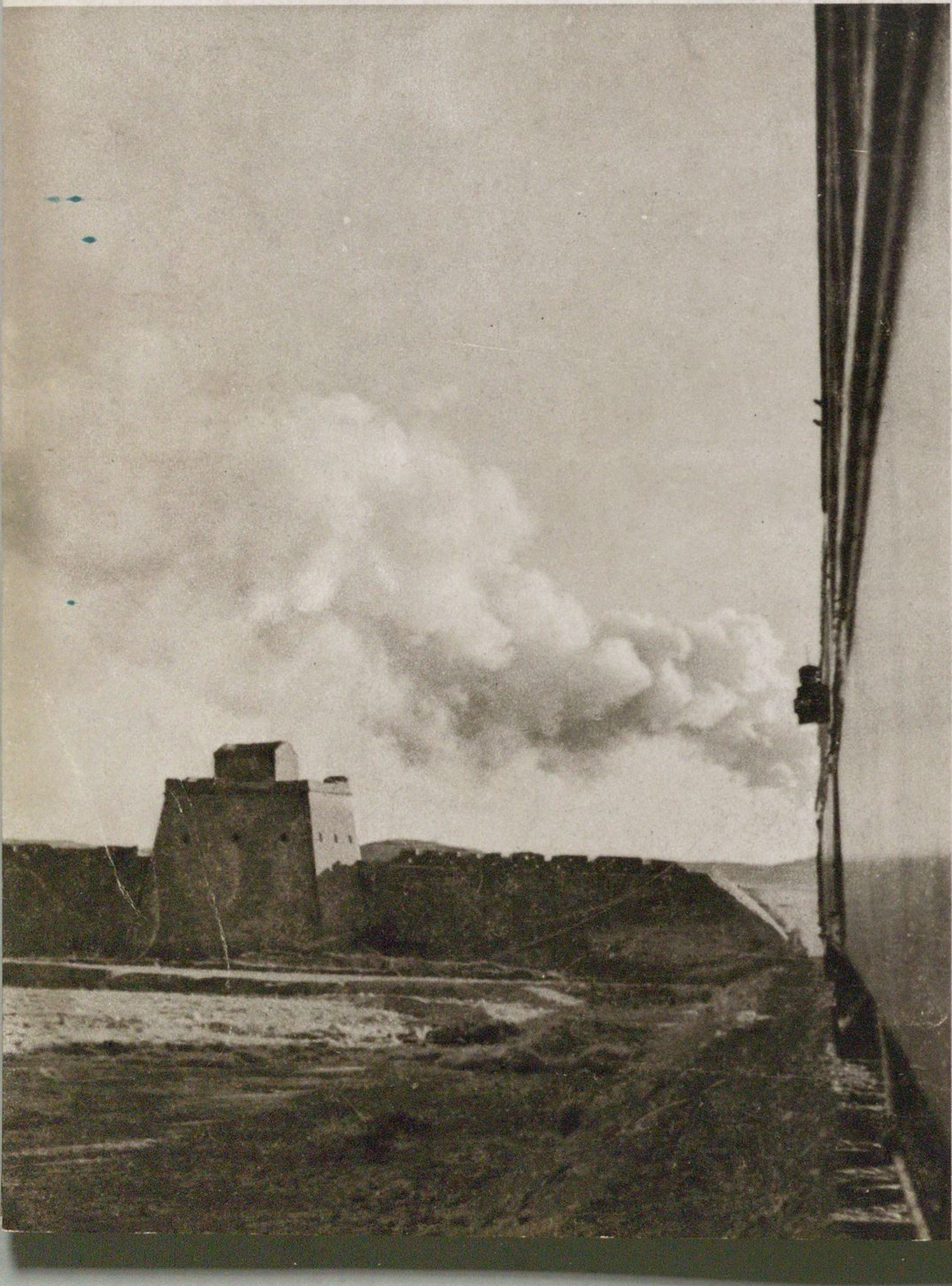
北支

現地編輯

THE NORTH CHINA



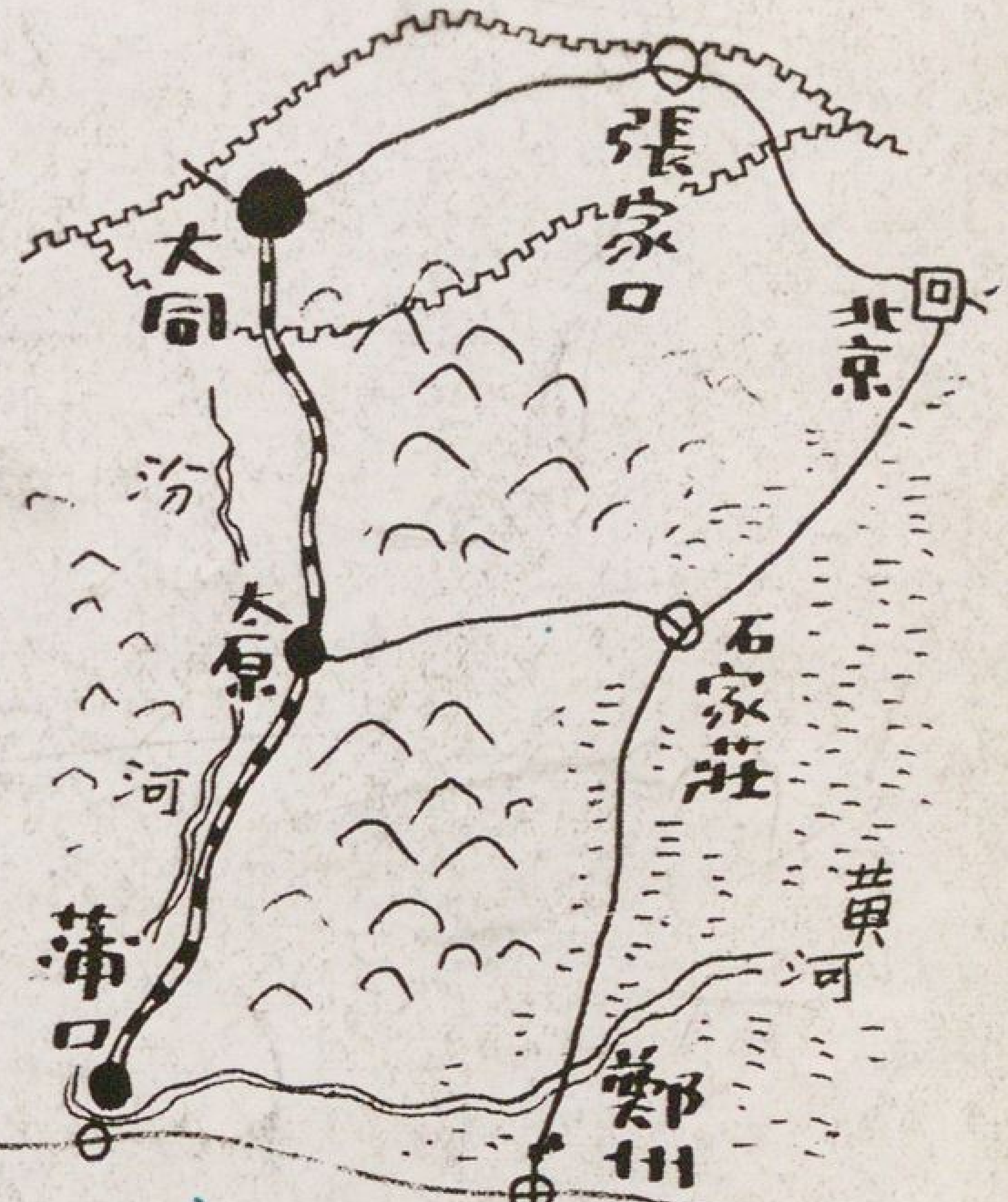
5 2



黄土層・山西

同蒲沿線

The Yellow-Soil-Bed in Shanhsi



山西の名は、明の時代その都北京から見て太行山脈の西側にあるところから起つたもの。その地形は、東は太行山脈によつて北支那平野を俯瞰し、西は南流する黄河によつて陝西と分ち、北に陰山山脈を控へ南は東に道をとる黄河によつて河南と境せられてゐる。かくの如く四圍は山脈或は大河をもつて天然の境界をなし、省内は概ね千呎を越ゆる黄土の高臺をなしてゐる。而もこの黄土の高臺は河水の浸蝕によつて深い峽谷を穿ち幾多の小山脈を形成してゐる。これ等の山脈の間に狹隘な黄土盆地が作られ、この低地が山西の生産地帯となつてゐる



黃土地帶の水蝕

丘と河

黄土層・山西 (2)



黄土の斜面を利用した耕地

かくの如き地勢は、自らに難攻不落の天険をなし、古來この地利に據つて天下統一を計つたもの枚擧に遑なしと傳へてゐる。古くは春秋時代晋の文公がこの地に據つて覇をとなへ、近くは閻錫山が二十年の久しきに亙つて山西モンロー主義を堅持し得たのも、自然の天険をなすこの地形の然らしむるところである

面積八萬餘方哩、人口千餘萬、一方哩平均約百四十人であつて、その密度は河北の三百、山東の五百五十に比して甚だ劣つてゐる。思ふに高臺に位し、耕地に乏しく、黄土は比類なき肥沃な土壌なるに拘らず雨量の過少が農業價値を減殺してゐるからであらう。この地は所謂乾燥地帯に當り、冬は中央アジアの寒冷な乾風の影響を受け、夏は海洋季節風の影響を太行山脈によつて阻まれてゐる。冬の早いこの土地は、北支那平野に小春日和を樂しむ頃、既に早く荒涼たる冬景色となる。唐詩選の五言絶句「汾上秋に驚く」に「北風白雲を吹く。萬里河汾を渡る。心緒揺落に逢ふ。秋聲聞く可らず」とあるを見ても時は秋にして既に寒風木々を震はす山西の土地柄が明かとならう

しかも尚、住民の多くが農民としてこの土地に生活を立て得るわけは、黄土が肥沃性に富むばかりでなく、濕氣を維持する力を有ち降雨が少いに拘らず穀物の生産を可能ならしめてゐるからである。若しこの黄土地帯が有利な氣候に惠まれてゐたらば、最上の農業地となつたであらう

この黄土は軟かく開掘が容易であるため、農民の多くは黄土の崖を掘つて穴居してゐる。洞窟は冬暖かく夏は涼しく建築木材に乏しいこの地方の典型的な住居となつてゐる

その昔西北より黄河の流域に向つて移住したと云はれる漢民族は、概ね陝西、山西の地に都し、後世堯舜の治と讃へらるゝ理想社會も、この山西を中心として營まれたのであつた

Hills and Rivers in the Shanhsi Range

凍れる汾河



黄土に生きる

黄土層・山西 (3)



穴居内部（日本の新聞紙が貼つてある）

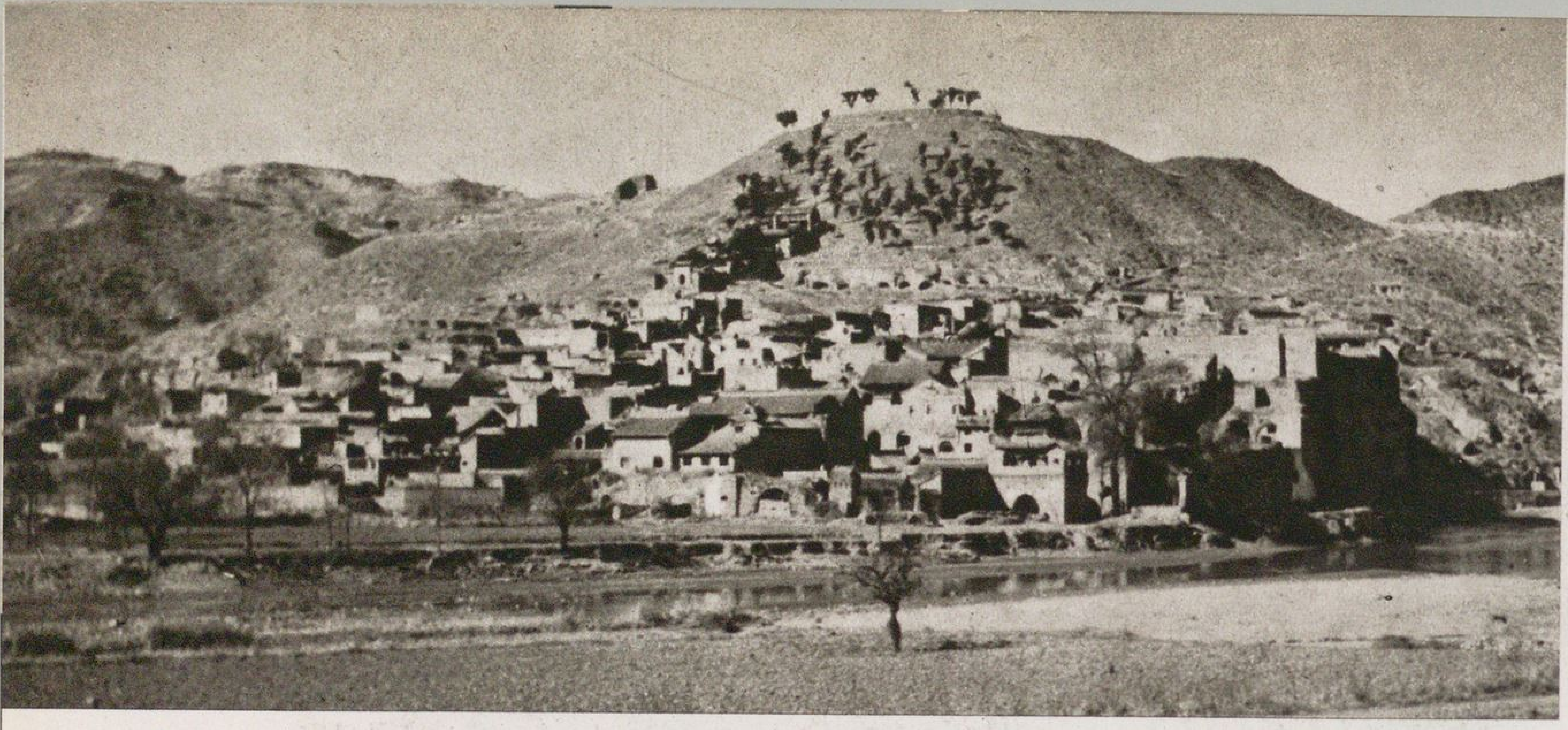
その後文化は東南中原の地に移るに及び、この地の文明は見るべき發達を示さなかつた。然るに十九世紀に入つて石炭、鐵、鹽等の豐富な鑛產資源が注目を惹くに至つて、再び急激な發展を示すこととなつた。就中石炭の埋藏量はアメリカのペンシルバニヤに比すべく、その數を擧げんより無盡藏と形容するのが妥當とされる程である

全長八五六粁に及ぶ山西縱斷の同蒲線（大同―風陵渡口）、山西の中心太原より東走して石家莊に至る石太線、及びその支線の總ては、山西の鑛產資源、就中石炭運搬の爲に敷設せられたと云つて過言でない。事變後、その他の北支鐵道と共に華北交通の運營下に入り從來狹軌であつたのが、石太線は昨年十月既に標準軌に改められ、同蒲線また改軌工事を着々進めつゝあり輸送力の增進は期して待つべきものがある

實に興亞の經濟建設は、山西の鑛產資源に依存するところ多かるべく、之に自然の天險山西の防共作戰根據地としての重要性を加算すれば、山西の重要性は益々重きを加ふると云ふべきである。



Cave Dwellers in the Shanhsi Region



穴居部落・許家店附近



同蒲沿線の麥畑

新　秩

中

Order in China





城門の前で



休息のひととき

序下の

國女警

Police-Women under the New

北京驛にどつと下車する中國人、之を検問検査する男警官に入りまぢつて中國人の女旅客を調べてゐる女のお巡りさんがゐる。フランコ將軍のかぶつてゐるやうな形の帽子に毛織のスーツをきてゐるのが華北交通の女警で、日本の海軍士官のやうにピンとはつた帽子に男のやうな木綿の詰襟の洋服をきてゐるのが北京市の女警さんである。短い斷髪は帽子にかくれて男と見まちがへるやうであるが流石にきびきびと立ち働いても何となく動作はやさしい。北京市の警察で女のお巡りさんを採用したのが今から九年前の民國二十年でその時はたつた二十人にすぎなかつたが今は七十五人に増加してゐる

宿舎の前で中國獨特の武技体操



中國のやうに女性を傳統的に大切にしてゐる國は又女性を利用する犯罪も多い譯で彼女等の活躍は仲仲めざましく北京市內で摘發される犯罪は、最低月三十件と言はれる。どう言ふ犯罪が多いかと言へば第一にモヒ、コカイン、阿片等の禁制藥品の密輸で次に政治運動に關係したものである

舍に入つて檢閲檢査の合ひ間には學科や體育にいそしんでゐる。月給は十三圓、十四圓、十五圓の三種であるが現在の物價高に三圓の手當をうけてゐる

夜閉つて朝早く開く北京をかこむ城門の出入者の檢査、驛の乘降客の檢査、又不逞人物の市內侵入の情報があれば黑ぬりの警乘車に飛



街頭で





驛で

活躍する 女警

Chinese Police-Women at Work

女警達は大體女學校卒業程度で年齡は十八歲から二十一歲迄が大部分を占めてゐる。全部一定の寄宿

びのつて要處々々の通行人[illegible]檢査とめざましいばかりの活躍ぶりを示してゐる。



城門の前で女學生も



馬車にのつた花嫁さんも





河の高低による落差を調節する水閘・淮陰

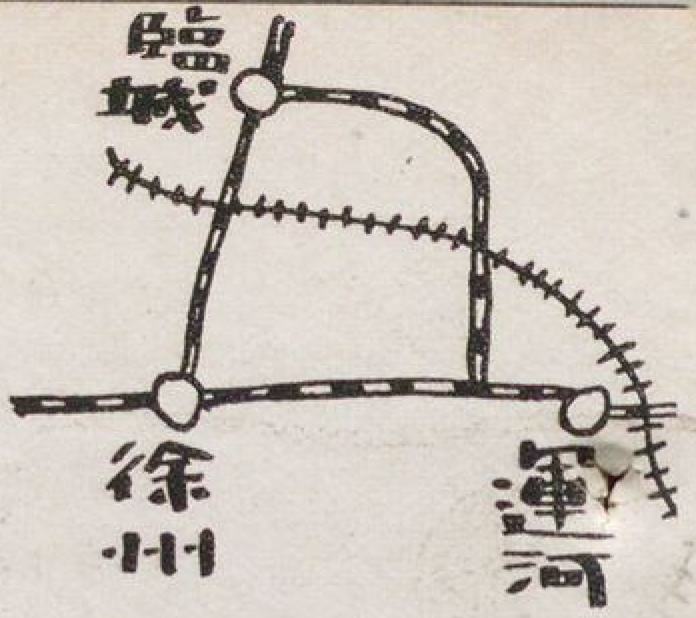


荷揚人夫・宿遷

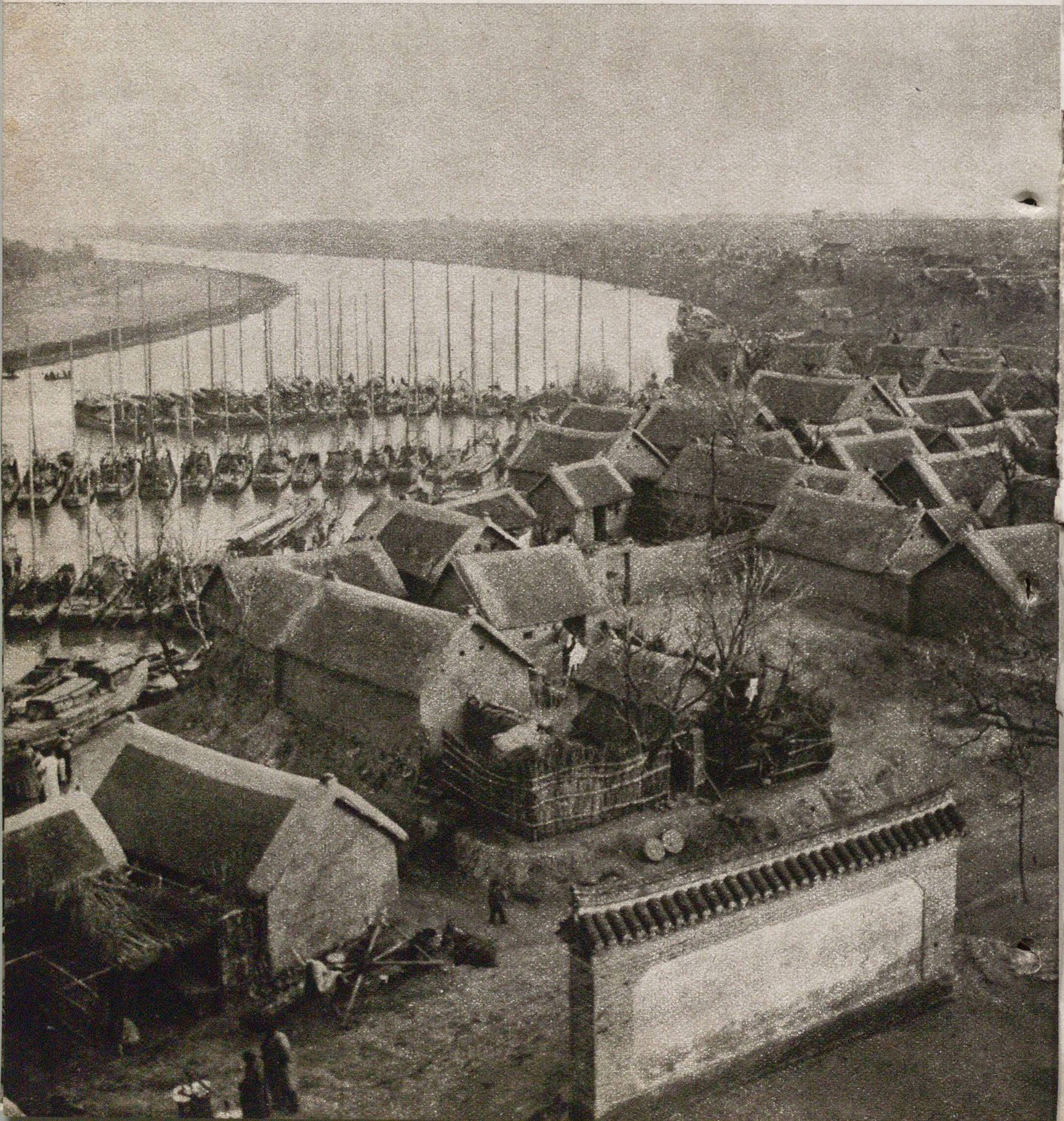
支那は古くから運河が發達してゐるが隋の煬帝時代と、元の忽必烈時代に開鑿されたものが著名である。江北運河との中間：詳しくいへば東隴海線の運河站から淮安を結ぶ三百四十キロの區間を蘇北運河と呼び、今から約一千三百年前の煬帝時代の遺物といふ。河幅は大體七、八十メートル、水深はほゞ二メートルぐらゐで現在四、五十噸級の民船が約五百艘運行してゐる。沿岸一帶は地味豐沃のため小麥、大豆、高粱、落花生その他の農產物が多く、殊に蘇北米といつて支那一流の優良米の產地として知られてゐる。運河站を發して南へくだれば、縣城宿遷がある。人口一萬二千、農產物の集產地として重きをなし、附近に鵝飼の盛んなことと、ガラスの原料硅石の多いことで知られる。一時代こゝに澤山の硝子廠があり、南支むきのガラスは、殆んどその手におさめられてゐたといふ。更に下れば蘇北運河の難關たる楊家莊の水閘に達する。水閘とは河底の高低による落差を調節するために造られたもので、こゝに頭閘、二閘、三閘と連絡した水閘が關所のやうに控へてゐる。そのつぎが淮陰の運河站である。蘇北米の中心地でこの邊りから民家の様子が變つてきて日本のやうに欄干の附いた二階建が多くなり、住民は草鞋を穿き蓑笠を被つてゐるのが眼を惹く。終點の淮安は韓信の股くゞりで有名である

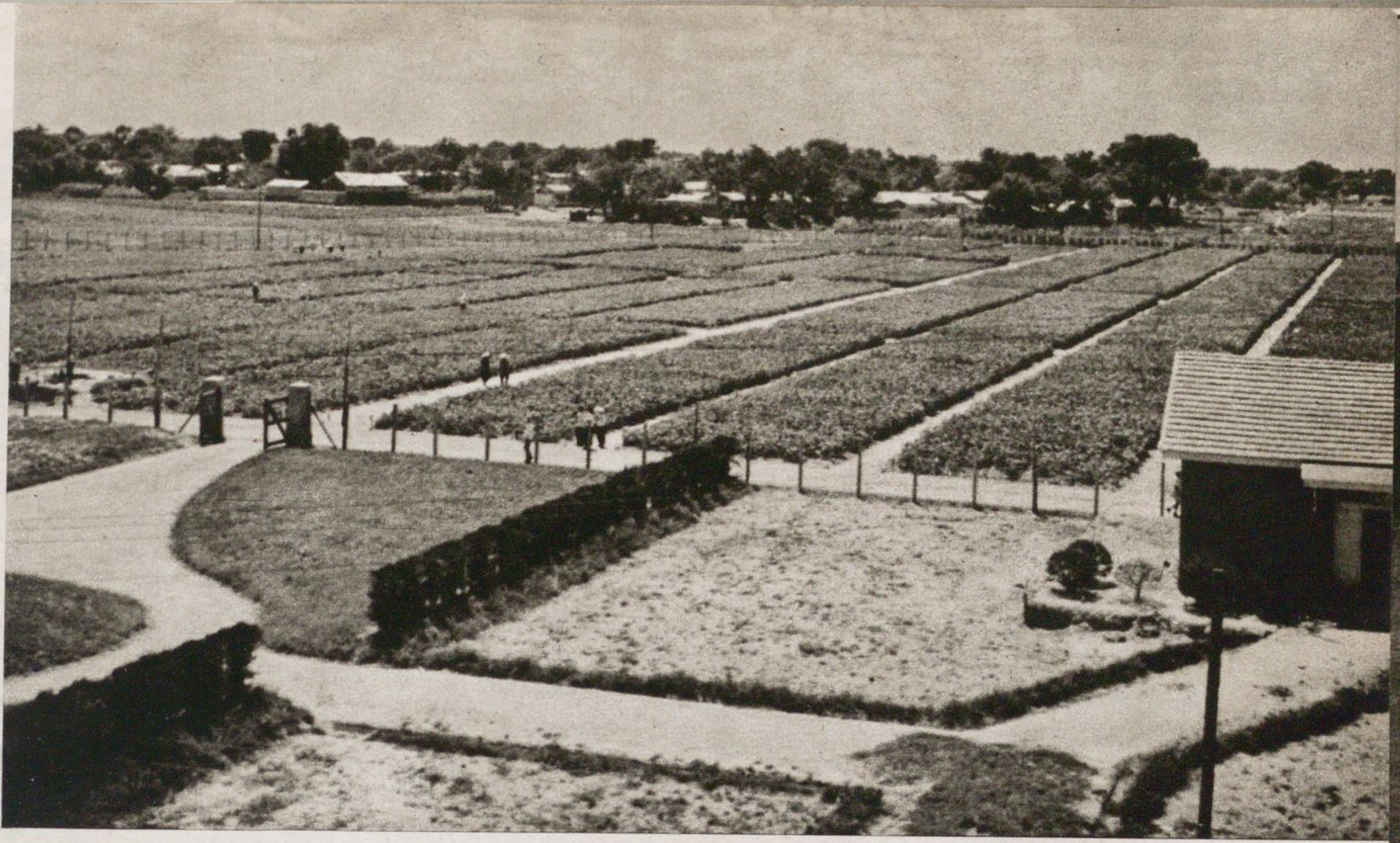
蘇北運河

The Supei Canal in Northern Kiangsu



衆興鎮碼頭





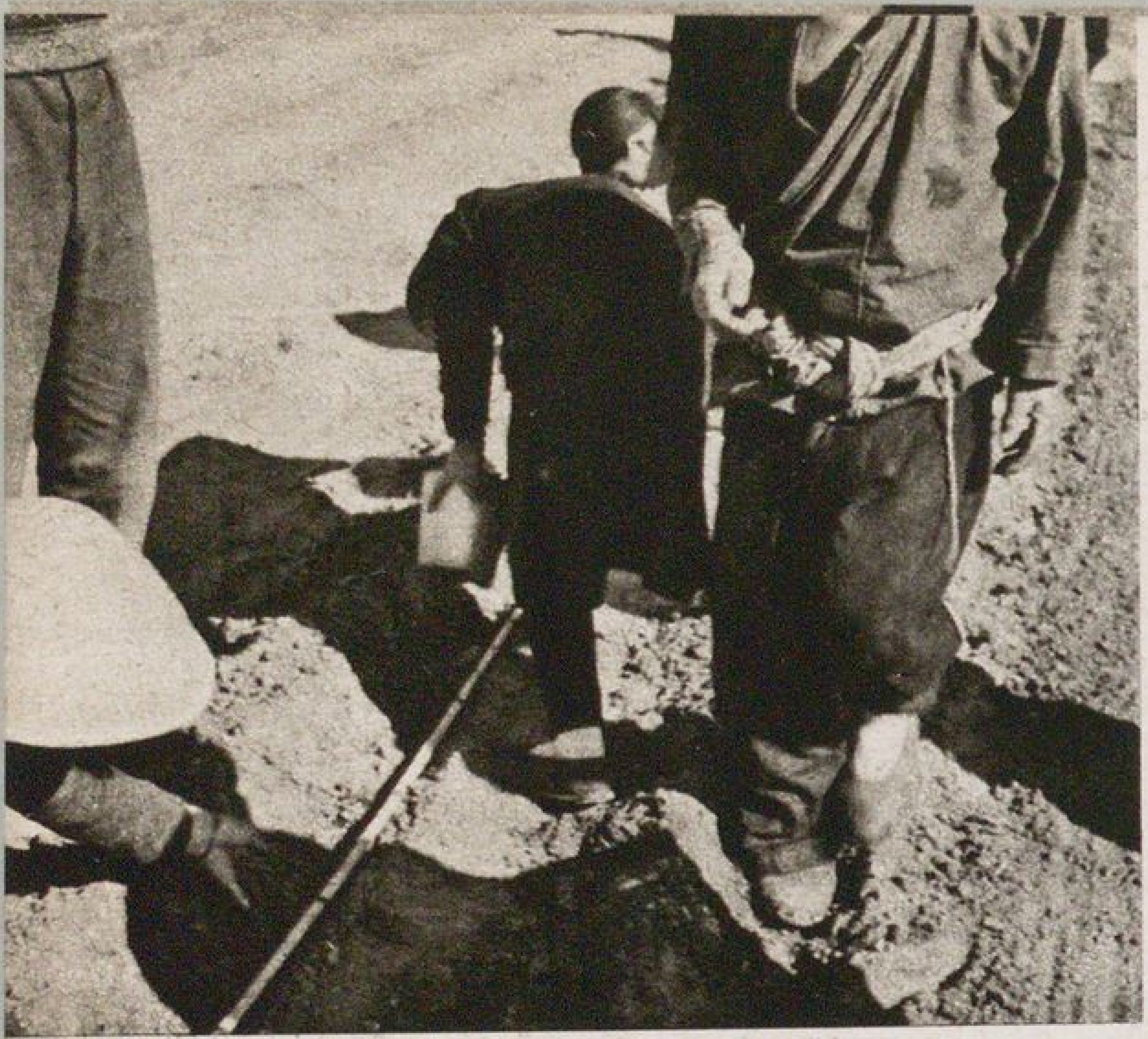
棉花の試作圃

封建的制約の下に立遅れてゐる北支蒙疆の農業を近代化する爲には先づ以て科學的研究調査が必要である。華北交通會社では、住民の八割を占むる多數農民の生活向上を期して、各地に農事試驗場を設け、各種の科學的試驗を行ひ、その成績を廣く一般に知らせ、傍ら優良な種子、樹苗及び種畜等を育成配布し優良品の普及を圖つてゐる

これら試驗場の中心が、通州城外東南二粁にある通州農事試驗場である。同試驗場は前北寧鐵路管理局長殷同氏（現華北交通副總裁）が、商品作物の大宗棉花の栽培改良の必要を痛感し、關東及び滿鐵の援助を受けて設立したもの。當時特派された日人技師は通州事件に遭つて北支產業開發の途上の尊き犧牲となつた。その後華北交通の設立に伴つて同社の經營下に入り、內容施設は一段の擴充を得て棉花の改良增產の科學的指導を中心に、一般農藝化學、種藝、畜產、作物病理並に害蟲に關する試驗調査を行ひ、傍ら氣象狀態の總括觀測をも行つてゐる



棉花の乾燥



棉花の播種

大地に芽ぐむ科學

華北交通・通州農事試驗場

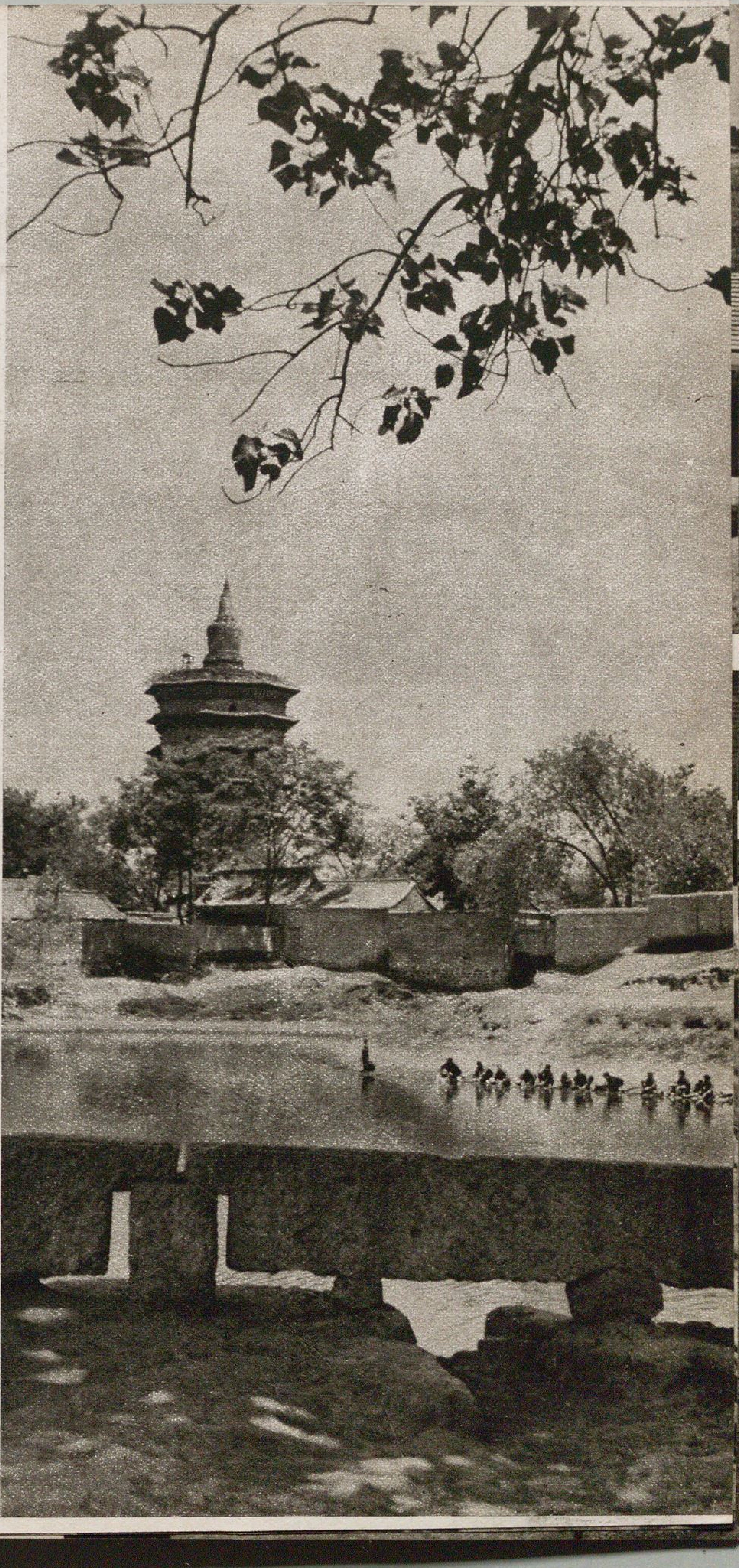
North China Railway's Agricultural Experimental Station at Tungchou



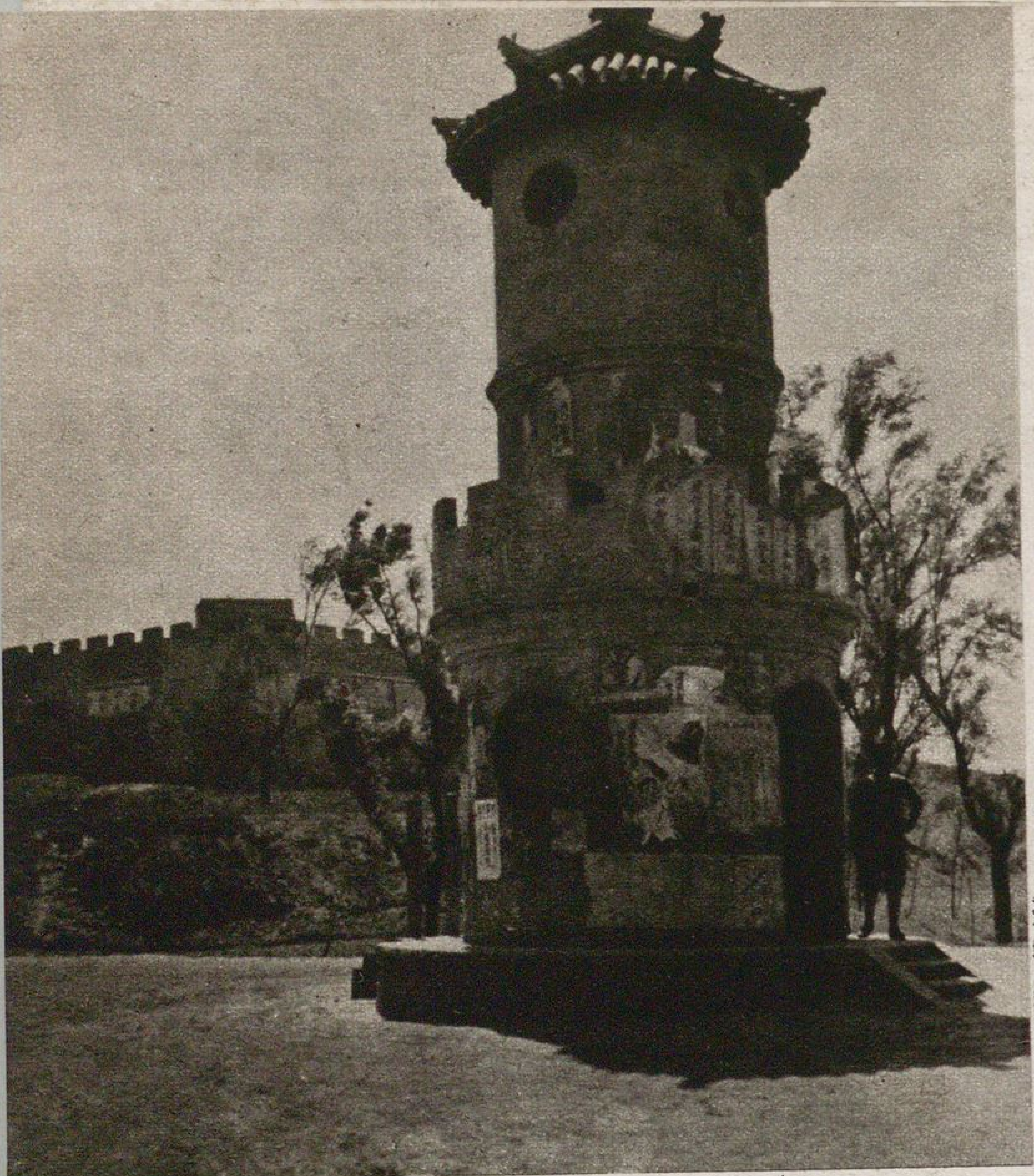
彰德

彰德（安陽縣）は河南省の北端に位し河北、山西兩省に對する經濟活動の要地。北京から京漢線で五〇七キロ、十九時間。人口七萬（邦人一千）沿線屈指の商業都市である。附近一帶は地味肥沃。小麥、棉花の產地として聞え、邦資の製粉、紡績工場の進出を見つゝある。その他藥材、綿紗、絲繭を出す。三國時代以來の古都で舊蹟が多い縣城・後魏の築造、宋の景德年間（わが藤原時代）の增築。周圍六キロ天寧寺・驛の東南約二キロ。隋代の創建で、元、明時代の佛畫、佛像を藏す韓王廟・驛の東南約二キロ。宋の宰相韓琦を祀る。歐陽修の撰になる晝錦堂碑ほか二十數基の石碑がある。韓琦が胸臆を抒べた「安陽集」の版木を藏す袁世凱の墓・驛東南四キロ。民國八年（大正八年）竣工。市街を一眸に收むる高臺の勝地に石獸、石人、宮門殿堂を配し、帝陵を模した壯麗なもの殷墟・驛の西北二十キロ、小村附近一帶。史記その他の傳ふるところにより殷の都の跡と認めらる。光緒二十五、六年（明治三十一、二年）以來發掘される「龜甲獸骨文字」は殷代の歷史文化考察の資料として考古界に著名湯陰・彰德より南二驛。古の麥里の地。驛より一キロの岳飛廟に岳飛自筆の石刻の出師表と跪座せる秦檜の像あり

Changte on the Peking-Hankou Line



二虎橋から大寺塔を見る



城内交通塔



袁世凱の墓前の武神像

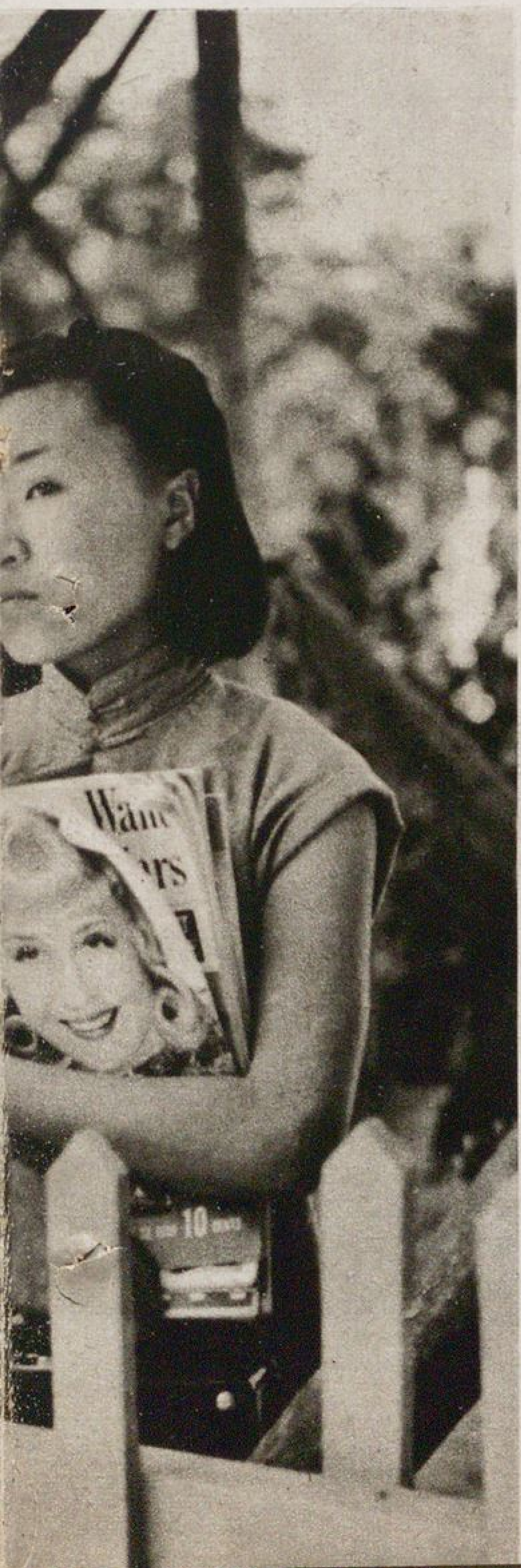


大寺塔から城内北門を見る

中國
近代

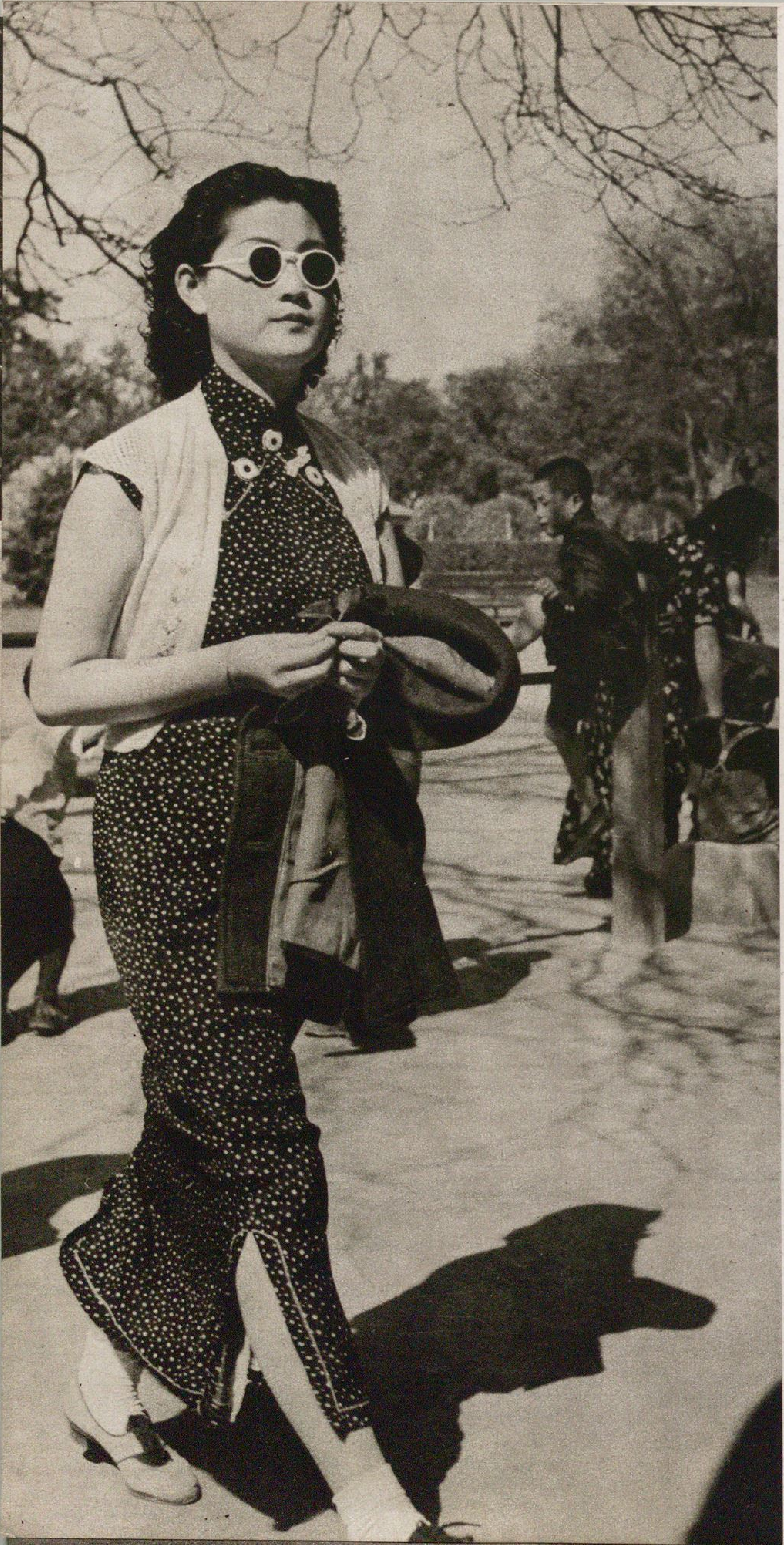
くすんだ灰色の北京の街頭に咲き出す女達、それは草花のやうに季節にさきがけて鮮やかだ
颯爽たる摩登女子（モダンガール）の姿が不思議に調和を破らないのは北京と云ふ街の恐ろしく同化力の強い性格を示すのだらう。尤

of New China





牌樓の下を

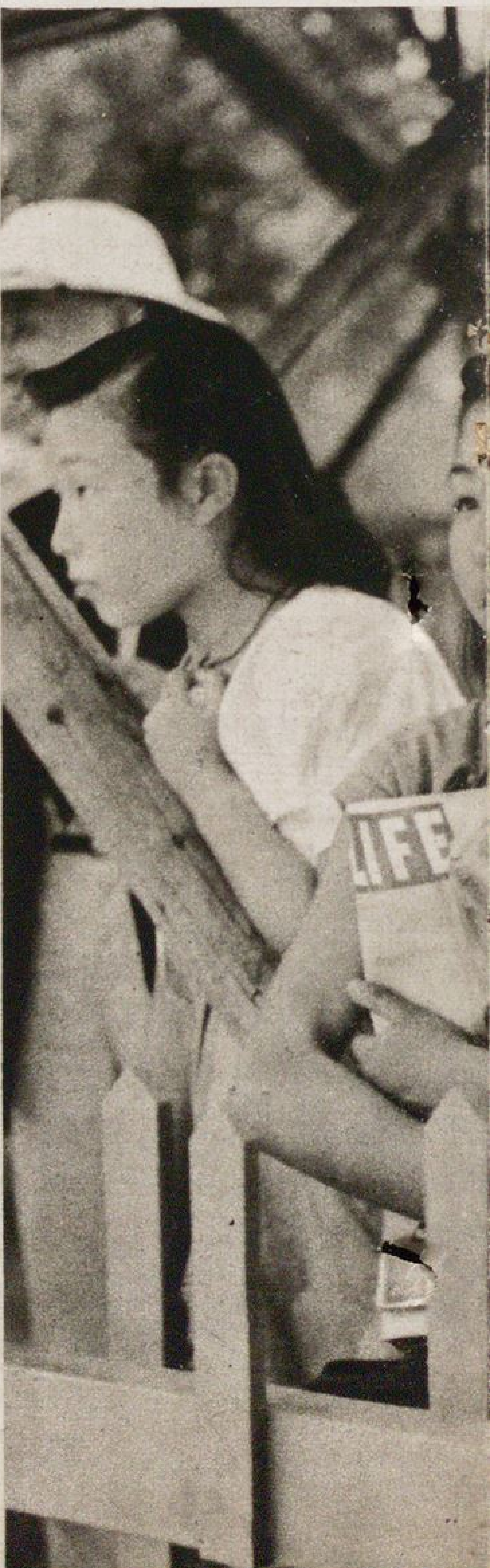


中央公園で

の女性

も歐化しながら決して中國本來の姿を失つてゐない、强靱さの故もある
彼女等がほんたうに目醒めた時支那といふ巨木も赤根を張り花を咲かせる、といふ人もある

A Modern Girl



中南海プールで



輸出港・秦皇島

開灤炭礦

Kailan Colliery.
(Peking-Shanhaikuan Line)

今日、石炭の多寡は一國の富と力のバロメーターであり、石炭のない國はその發展が制約されるとまでいはれてゐる。然るに我國の現狀は――石炭飢饉これに起因する電力不足で右往左往しそのために生産力の低下が眞劍な問題になつてゐる

ところで北支・蒙疆の石炭埋藏量は概算一千三百億トンと稱され、假りに我國の一箇年の石炭消費量七千萬トンを一億トンとしても、これをそつくり活用できれば今後一千三百年間は石炭の心配はないと云ふ勘定になる。中でも山西省の大同炭、河北省の開灤炭、山東省の中興炭など甚だ有望で、古くから世界各國の垂涎の的になつてゐる

現在開灤炭礦の經營は英國資本によつて行はれてゐるが、もともと清國政府によつて開發せられ、清國政府の重要なる財源の一つとして注目されてゐたものである。ところが西紀一九〇〇年勃發した團匪事件のため、清國政府はその權利一切を英國に賣渡すに至つたその後英國は開灤炭の輸出港たる秦皇島の經營をも行ひ、この一角に强固な經濟圈を築き上げたのである。同礦の礦床は京山沿線の唐山、林西、馬家溝趙各莊と廣大な地域に亙り、年産四百五十萬トン乃至五百萬トン、全支第一の出炭量を示してゐる。そのうち北支で消費されるものは年額約二百萬トン揚子江地方及び輸出向とされるもの約二百萬トンに及んでゐる。事變前製鐵用コークス原料として我國へも輸出されてゐたが、北支における日英間の種種の摩擦のため、その輸出量は僅かに二十餘萬トンに過ぎなかつた。然るに事變後開灤炭礦當局も東亞の新事態に漸く目覺め日本と漸次協力するに至り一昨年日本において開灤炭販賣株式會社が設立されたのを手始めに年二百萬トンの對日輸出が決定され更に對日輸出の增加を見越した三百萬トンの增産計畫樹立など開灤炭と日本の關係は益益緊密の度を加へつゝある



鐵道で秦皇島へ



林西坑・京山線古冶驛附近

子供たち



こわい　すべり臺



Children at Play

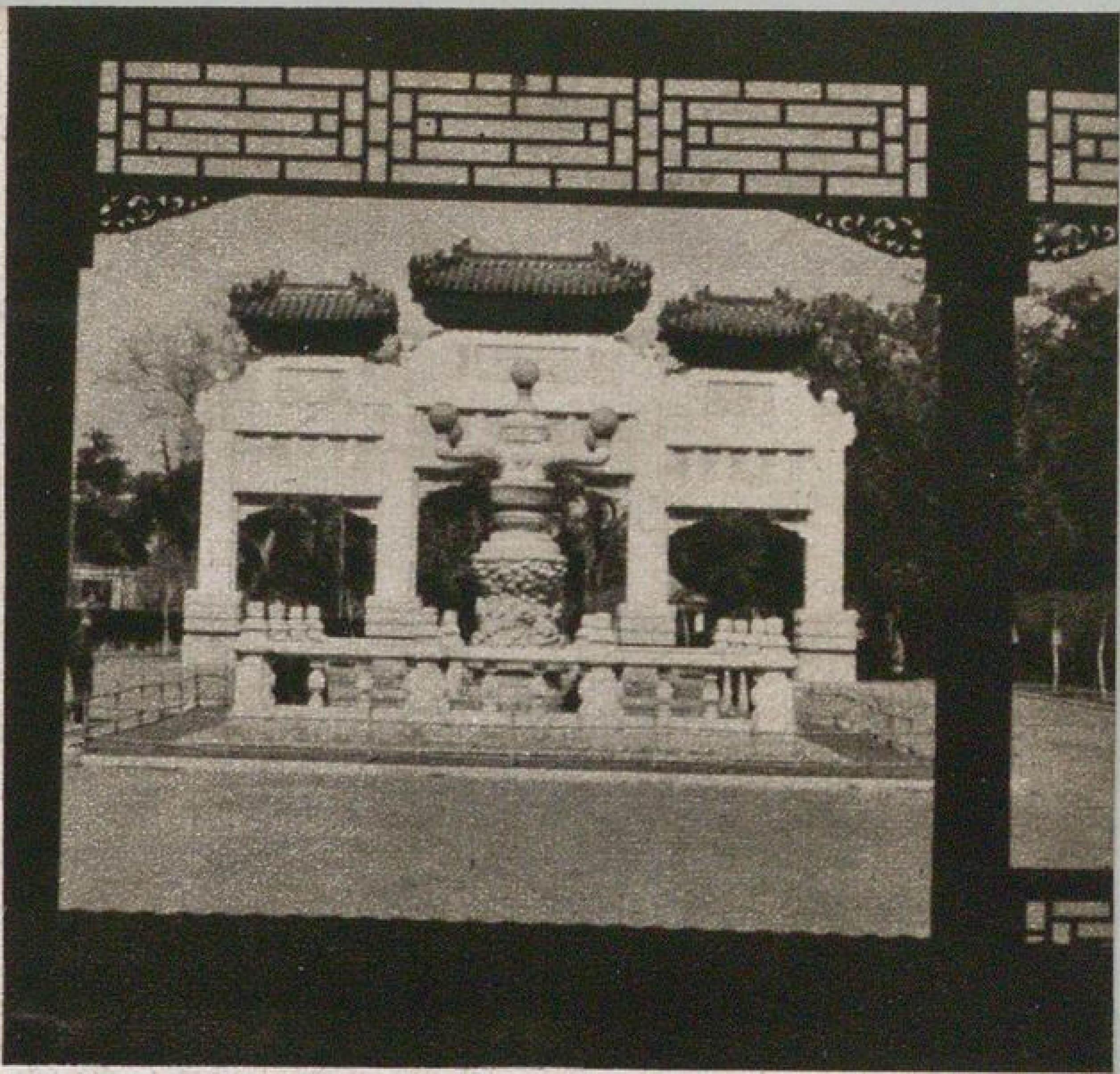
ぼくも學校にゆくんだ



みんなそろつて庭で顔を洗ひます

中央公園

The Central Park. Peking



公理戰勝坊

老柏樹下の喫茶

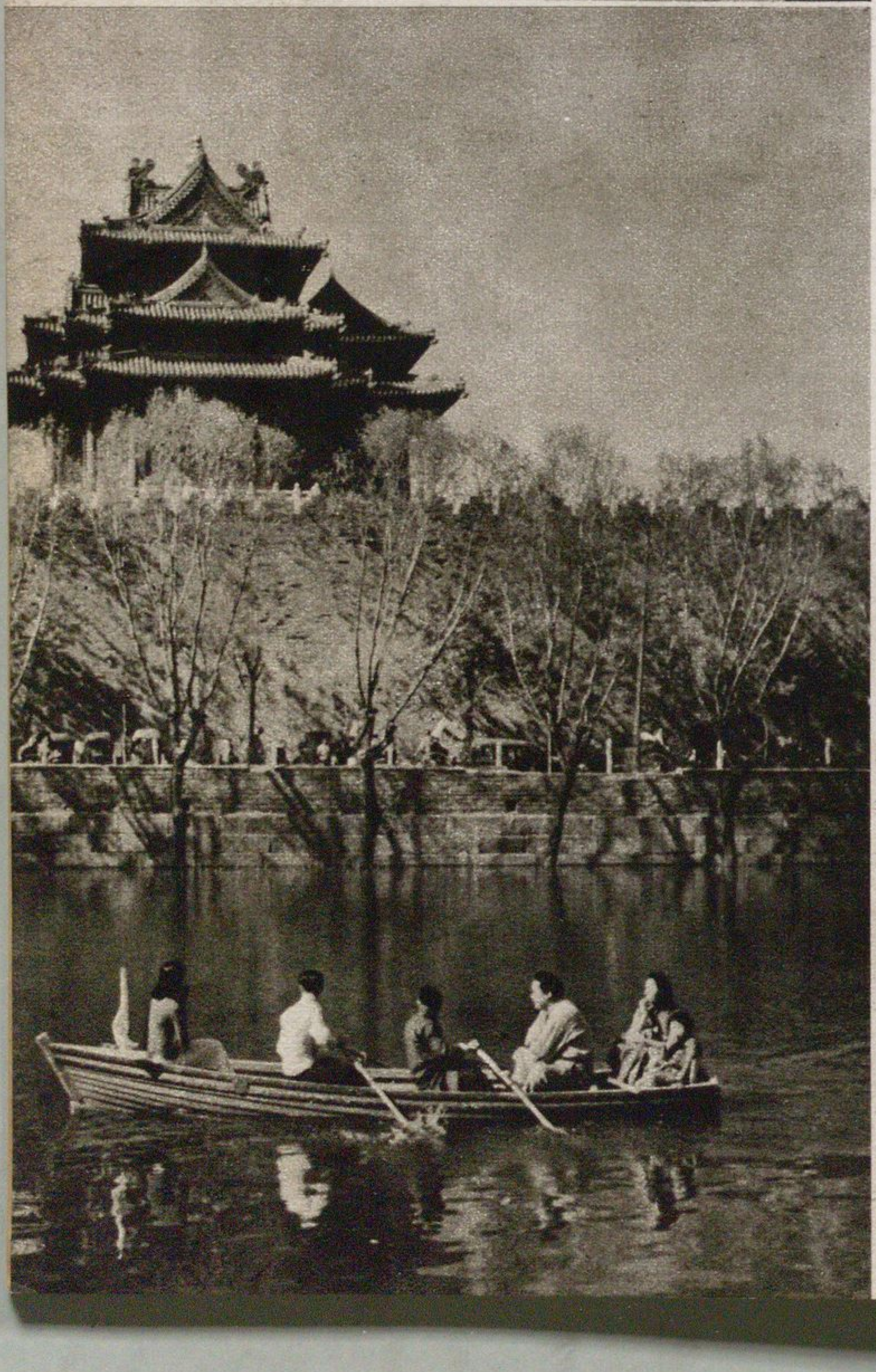


春から夏秋にかけて中央公園は北京人の大切な消閑場である。殊に夏分の茶店の繁昌振りは大したもので、無數に並べた老柏樹下の籐椅子にもたれて終日茶を啜り瓜子兒を嚙り何となく雜談に耽る光景は壯觀に似てゐる。天橋がプロレタリヤの娛樂場としたら、こゝは對照的なブルヂョアの消閑場であらう。北京人の平和な無爲自然さ、老子の子孫らしい顯著な一面をぶちまけたやうなところだ

こゝは昔天子の社稷壇で庶民禁斷の靈場であつた。それが民國三年公園として開放されたのである。社稷壇と云ふのは天壇・地壇と並び重要な天子親祭の壇で今も公園中央部に殘つてゐる。社は土地の神、稷は五穀の神である。農本支那の天子庶民は古來春秋二季の社日を定めてこれを祭つて來た。稷は黍稷と續けられる、和名きび、恐らくは高粱であり、これは漢民族の主要食料として五穀を代表したものだ。この壇には五色の土が堆んである。眞中は天子の色即ち黃色で四方に君臨すると云ふ漢代以來の五行說に基き、四方に各色の土を配してある。壇の周圍の墻壁の色も各々違ふ。かうした神聖な祭壇も今は塵塚より儚なく骸骨をさらしてゐるのである。もう一つ公園表口から入つて突當りに不思議な白い門がある。これは最初拳匪事件に横死した獨乙駐支公使コリントを記念したもので光緒二十八年今の西總布胡同西口に建てられた。ところが世界大戰になつて支那は戰勝國としてこの牌坊を打毀しさつさと公園に運んで名前まで換へてしまうた。曰く公理戰勝坊。さてこれは何を意味するか、お茶を啜つて考へてみるのもナンセンスではあるまい

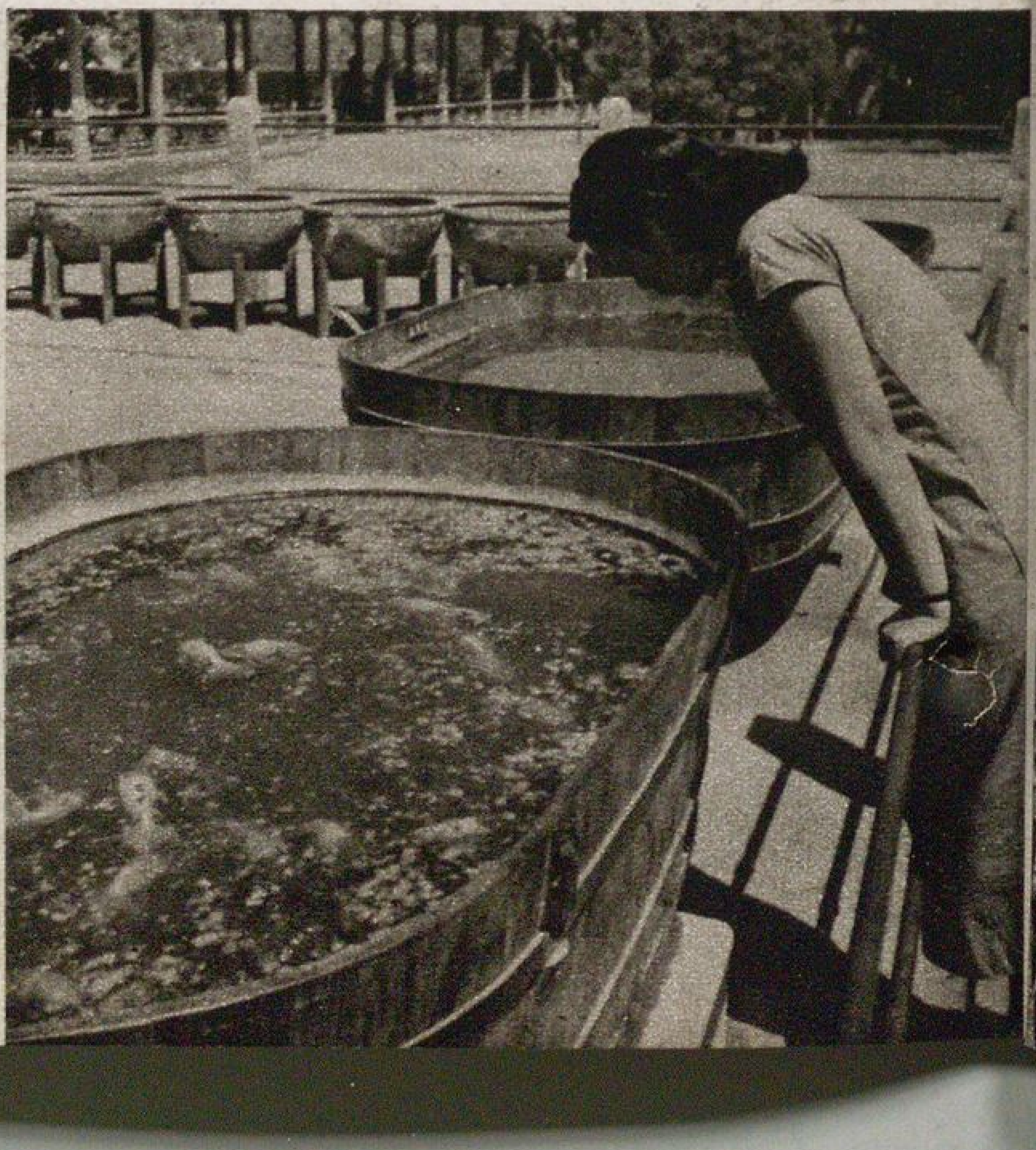


突當りが社稷壇



角樓とボート

金魚



洋(ヤン)車(チヨウ)製造

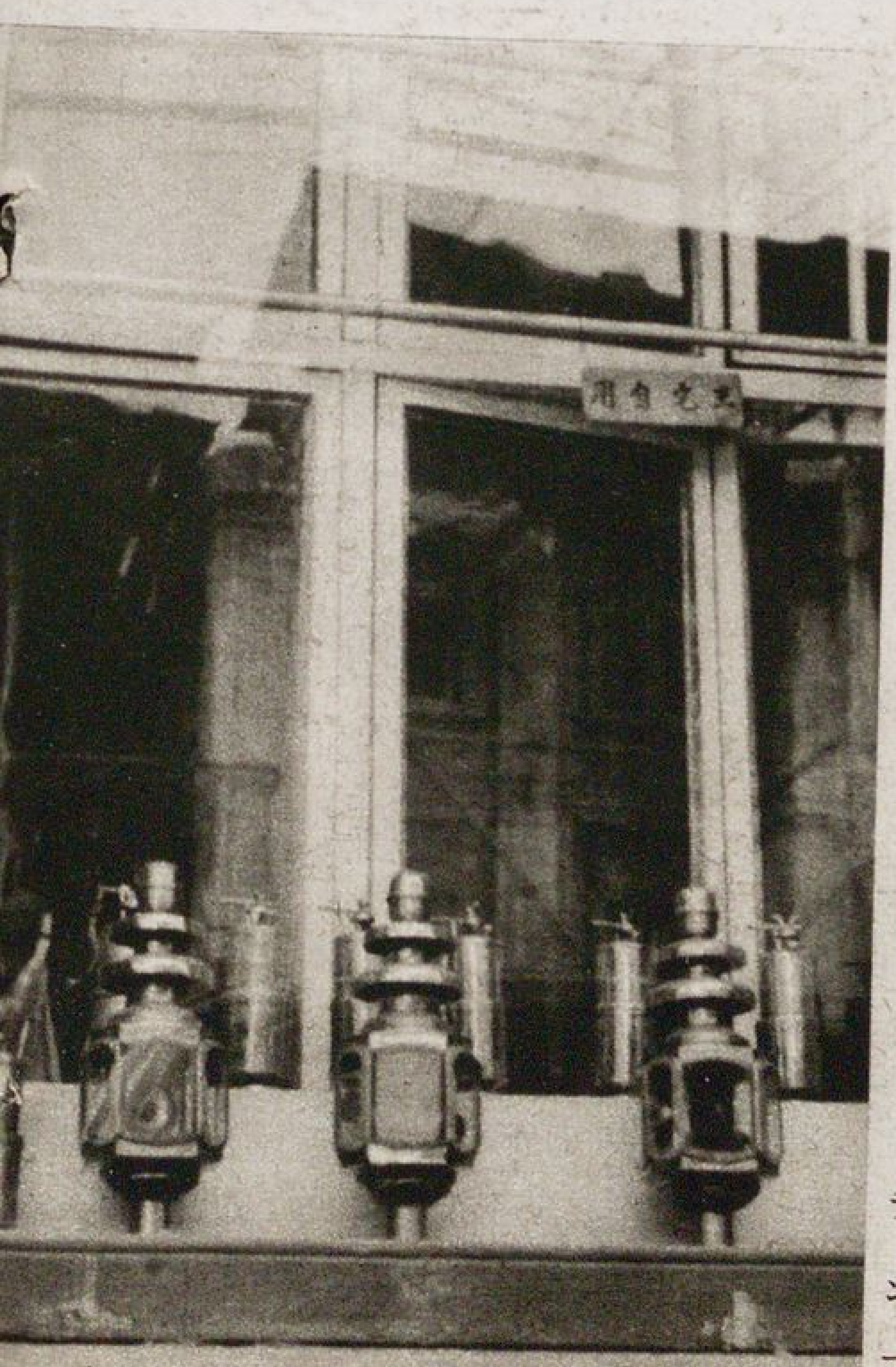
The Immortal Rickshaw under Construction



北京では洋車(ヤンチオ)といひ天津では膠皮(チアオピー)といひ上海では黄包車(ワンポウチオ)と呼ぶ

近代交通機關の發達してゐない支那の都市に於て最も簡便安値な交通機關はこの洋車であり、北支だけでもこれに從事する者は四十萬を下るまいと見られてゐる。わけても北京では四季を通じて名所の遊覽に通勤に通學に買物になくてはならぬ脚である。それだけに數も多く、昭和十四年末現在の登記數は三萬六千、洋車夫六萬四千百四十人を算へ、大通りは勿論、胡同（横町）といふ胡同に洋車の姿を見ないことはない

この洋車は三十年前の清朝末期、日本の人力車を眞似て鐵の輪を使用したのが始りで、その後現在のやうなゴム輪を使用するやうになつた。現在北京の洋車製造業者は約七十軒で毎戸、日に五、六輛から十二、三輛を製造してゐるが、その材料は總て日本からの輸入品である。價格は材料騰貴によつて事變前の三割乃至五割方高くなり、白銅車（柄の飾りやランプや接目などに白銅を使用したもので主に自家用につかはれる）は三百二十圓、黄銅車（柄の飾り、ランプその他に赤銅を使用せるもの、主として客待ち車に使用せらる）は二百五十圓前後である

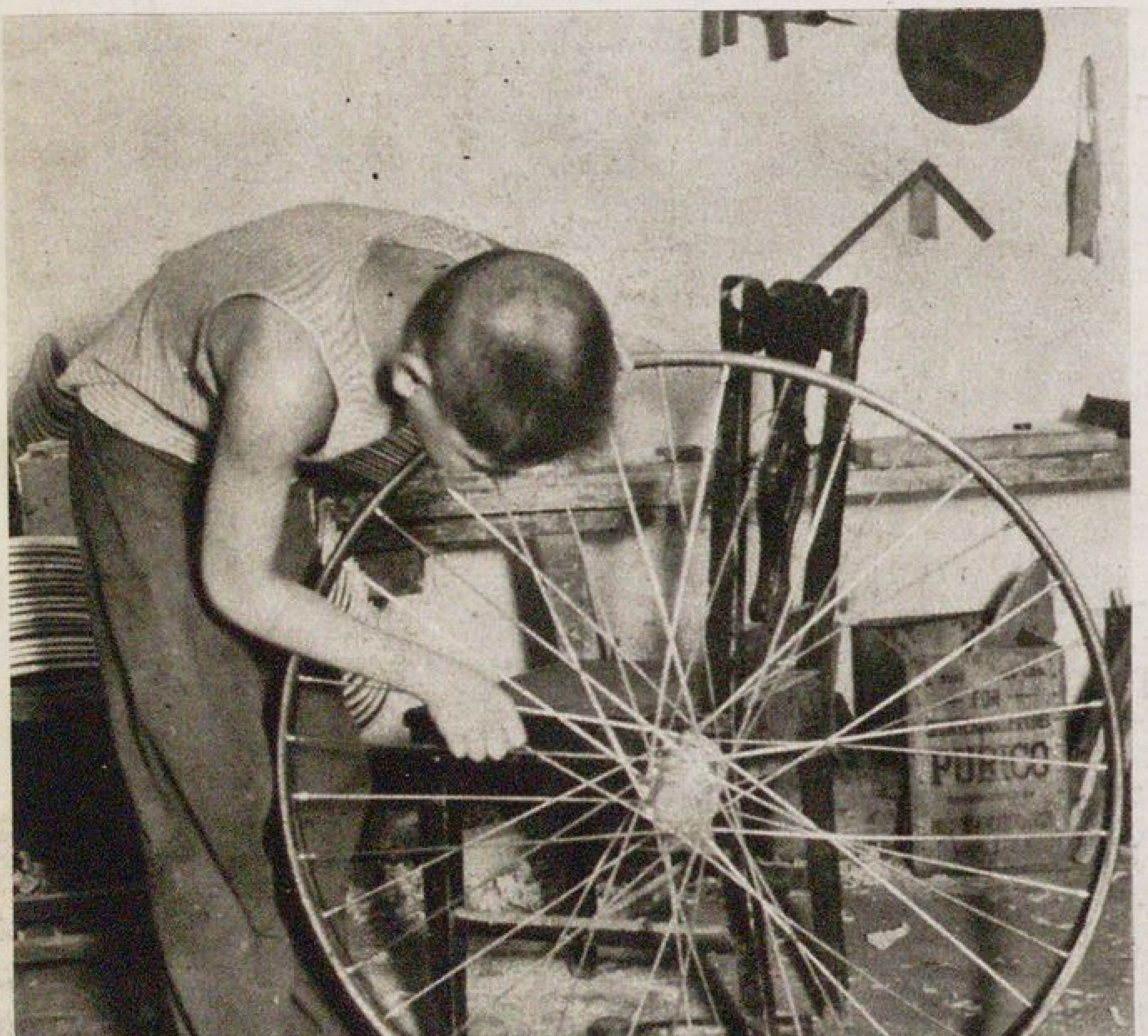


ランプ

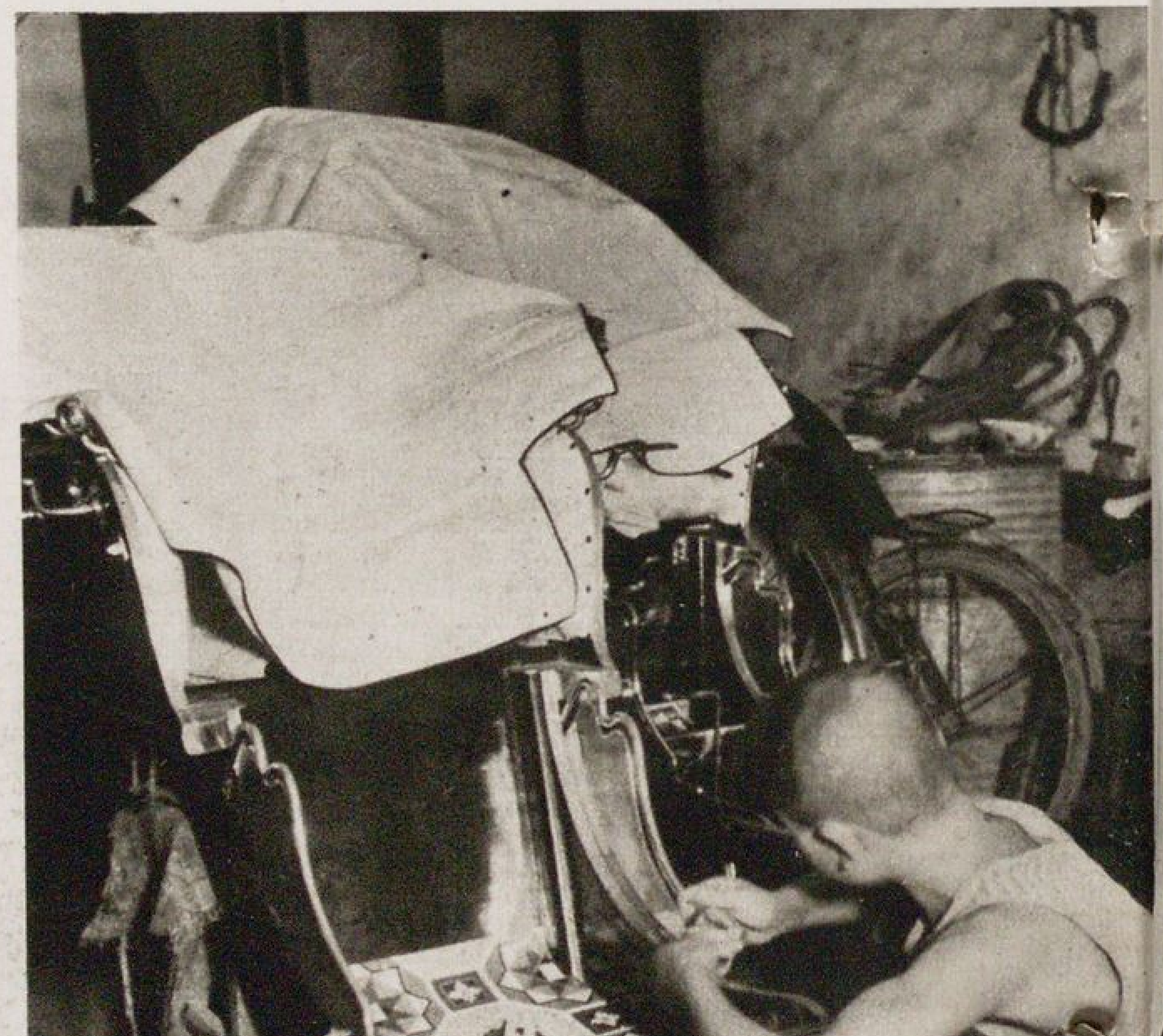




朝・城壁の下で——新郷にて



車輪



飾付



蒙古の家

Mongolian Dwellings



ブリヤード部落

（シリンゴル盟貝子廟東南約八十粁）



蒙古の家

蒙古の家を包（パオ）といふのは、支那式の呼び方で、蒙古語ではグルといふ。荒漠たる原野に牧草を追つて轉々する移動家屋で、格子塀や天井の丸輪となる柳條と二、三十本の丸太棒、それに屋根からなり、周圍には多ならば羊毛の氈子を張る。僅か一時間足らずで組立て取外しのできる頗る簡單な住居である廣さは直徑五メートル内外、高さが二メートル半内外で、疊にして十數疊敷

大陸的氣候に適應して、夏は涼しく冬は暖くできてゐる。毛皮や木材の騰貴してゐる昨今では、これでも四、五百圓ぐらゐかゝると謂ふ。内部は床板や疊代りに毛皮を敷き、中央に炊事用の鐵製五德が置かれ、入口は一箇所で眞正面が佛座と應接用の上座敷に當り、その左右が家人の居間兼寢室となつてゐる



半固定包



盟長の包



天井



內部



內部



牛糞で造つた物置

Snapshots of Mongol Dwellings from Different Angles

大きな歴史 小さな歴史



新入社員第一陣

▽「大陸交通の完成」期して、華北交通會社入りする學窓出の新人第一陣がこの程、北京に到着した。使命と理想を双肩に、「北支、蒙疆の天地に交通報國するのだ」と、その建設氣概は既に北京驛ホームを壓した ⇦

共産思想撃滅隊 ⇩

▽新中央政權の樹立を前に、北京百五十萬華人によつて大々的な剿共運動が行はれた。三月十日、北京天安門前に各機關代表者が參集して、撲滅共産の氣勢を擧げ、「共産撃滅隊」を組織して市中に示威行進を行つた





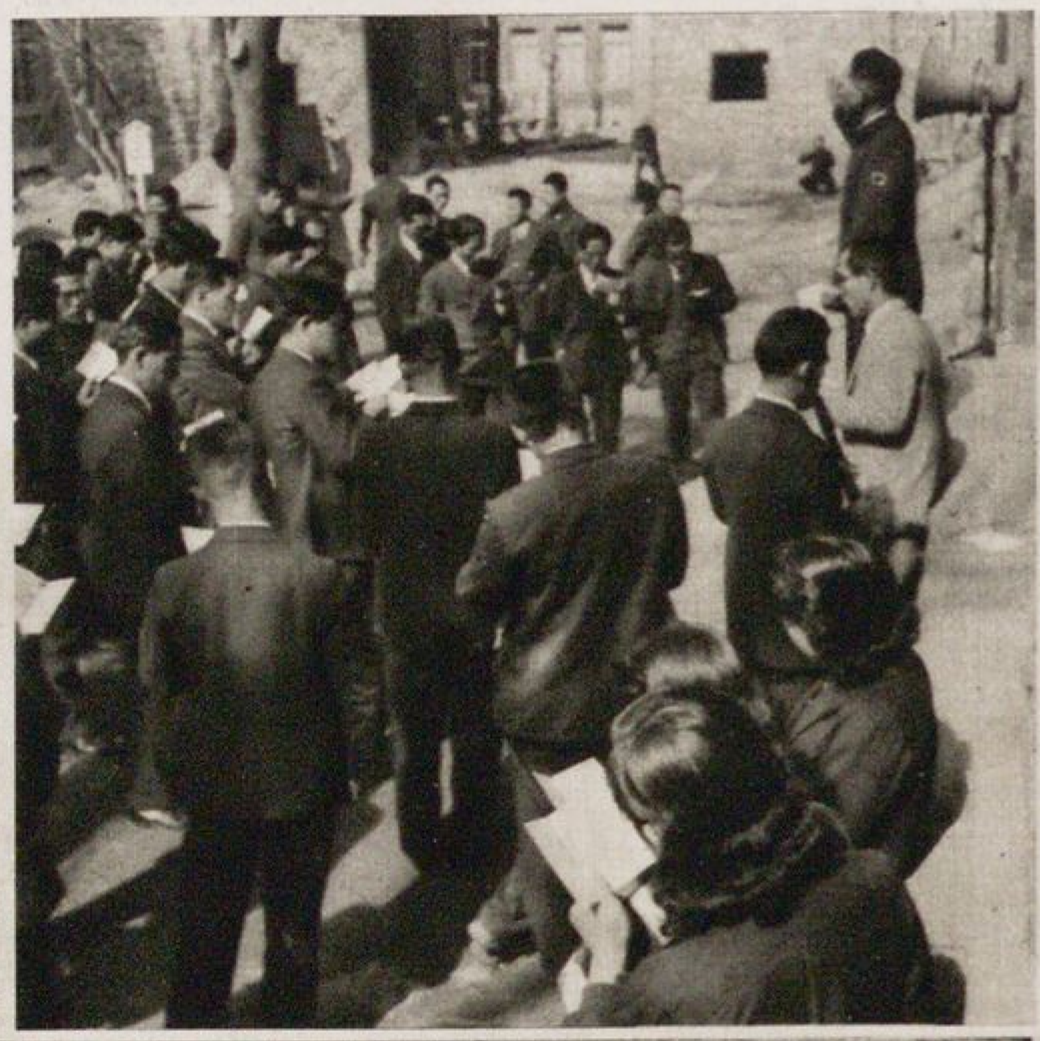
日華子供の電車 ⇨

▽北京の惱みの一つは足の便が悪いことだが、こんど日華兒童のために特に通學電車が走ることとなり、車中に童心親善の朗景を畫いてゐる



を迎へ、大陸各地では意義ある祝典が擧げられた。特に興亞の基地、北京では偕行社における北支軍主催の記念祝典をはじめ記念講演、記念映畫會などが催され、聖戰下に在留邦人の感激を新にした。寫眞は北京郊外陸軍墓地に於ける各團體代表

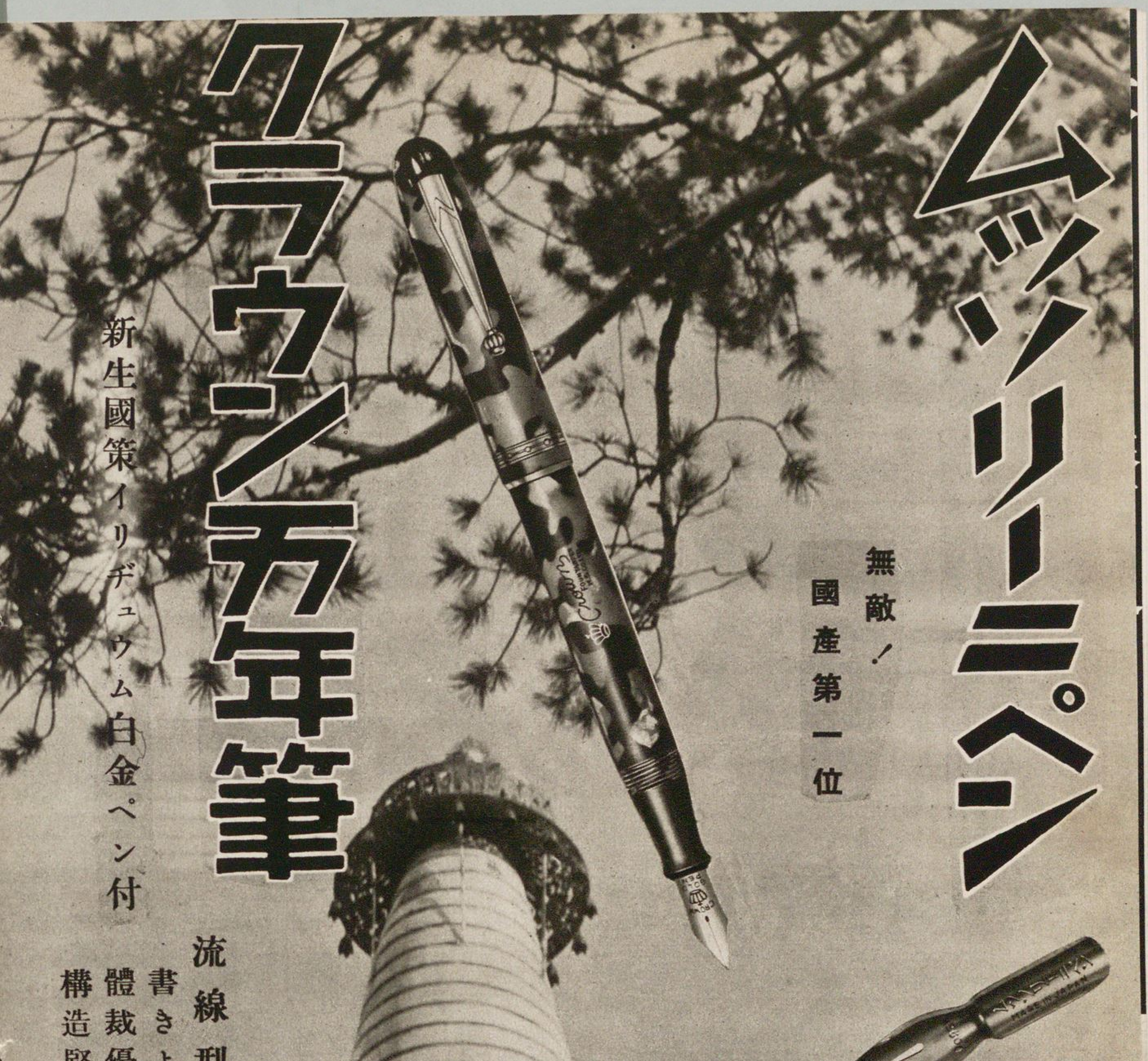
News-Flashs From North China







▽「興亞奉公日は日華人で……」といふので、華北交通會社は三月一日の奉公日から日華兩從事員で行ふこととなつた。このため日本人は中國國歌を、華人は「君ケ代」を、それぞれ練習し當日は兩國國歌の齊唱を行つた



ムッソリーニペン
無敵！
國産第一位
スラスラ書けて
錆びず値の廉い
國産の逸品！
クラウン万年筆
新生國策イリヂュウム白金ペン付
流線型
書きよく
體裁優美
構造堅牢
大阪 株式會社 澤井商店

新民會の性格と使命

小澤開策

祖國の人達に、滿洲國協和會の存在と使命とは既に常識的理解の程度まで認識されてゐるやうだが、北支那に中華民國臨時政府の表裏一體となつて戰後の建設と民衆組織に大童の活動を續けてゐる「新民會」の存在に就ては餘り知られてゐないと思ふ。

従來北支に於ては軍宣撫班と新民會の兩者が共に民衆宣撫工作に從事してゐたが偶々三月一日を期して、この二元的な民衆宣撫組織が一元的に統合され、大新民會の威容を整へて再發足するに到つた。平和の戰士として北支建設の理想に燃ゆる五千餘の日本青年が文字通り縁の下の力持ちとなつて參加してゐる。新民會は是非とも日本の人達に理解されねばならぬ存在である。

新民會に働く人々には表面の華かさは何一つなく、常に生命の危險を身近に感じ、低度の支那農村に挺身し、全く不自由な衣食住に起伏しながら、戰禍や、天災に暴らされて甚しい荒廢の中に在る北支農民のよき指導者、また慰安者として、只管精進してゐる之等五千の日本青年には實に身分の保證さへ與へられてないのである。現代の風潮として兎もすれば功利に走り、保身と出世に心を奪はれ勝ちな青年の多い中に、以上のやうな環境に甘じて默々と自分の信念を實踐してゐることは尊くも頼もしき限りではないか。

云ふ迄もなく、新民會を語り、日系職員の信念をお傳へするのには、一應今次支那事變の本質と特性を檢討した上に立たなければならぬ。支那事變が聖戰と呼ばれるのは、日支兩國の國民的な戰爭ではなく、また單に抗日蔣政權とその軍隊とに對する膺懲戰のみに止まらず、寧ろ抗日政權の背後に在る西歐資本主義の亞細亞侵略の勢力と共産黨赤化の魔手に對する東亞防衞の戰であり、國際植民地支那解放の爲の戰と云ふ歴史的意義があるからである。

從て背後の非亞細亞的魔手に踊る抗日勢力を皇軍が膺懲驅逐した地域は急速に復舊建設せられねばならない。東亞新秩序建設の第一歩は實に戰禍、天災に暴らされた支那農村都市の再建設にあるのであつて之れなくしては東亞新秩序建設の理想も單なる一方的掛聲に終つてしまふのみならず、皇軍の忠勇な將兵幾萬の犧牲と、百億以上の國帑を空しく費したことになる。今次の事變が「建設戰爭」或は「民心收攬戰爭」と云はれるのも此の理であつて、汪精衞氏を中心として近く成立する新中央政府は、日本の眞意を體得して新中國建設を目標として鋭意邁進される事と信ずるが、支那の廣大さに對し新政府の實力は未だ充分そなはれるものと思はれず、新政府自身の力では到底短時日に支那の再建は期待出來ない。そこで農村經濟の復興に、誤れる抗日思想の是正に、共産黨運動の絶滅に、新政府に協力する力が要請される譯である。大にしては新政府の成立に對し日本政府が總ゆる支援を惜まず協力し、北支那に於ては現地的に新民會と軍宣撫班とが統合して强力な一體となり新中央政府に呼應して北支の再建設をめざして再出發したのである。聖戰の意義を現實に即して中國人に認識せしめ、彼等の自覺と協力によつて東亞の新秩序建設の基本的實踐を着實になさんとするのが新民會の目的であり、挺身する五千の日本青年は聖戰の眞義を身に體して、東洋明日の運命を自覺した眞に支那を愛する人々の集ひである。

さかのぼつて日支兩國民の感情的相

内容

剋を顧るに、明治二十七、八年の日清戰爭に戰勝以來日本人の支那人に對する態度は「チヤンコロ」意識に終始し、國家もまた西歐の文物移入に事念し僅かに先覺の士が東亞同文書院を創めて日支關係の將來に備へて居り、他には個々の先覺者が日支の將來を慮つて研究して居つたに過ぎない。尠くとも滿洲事變前まで日本の學校で英語を學ばせられる生徒は百萬を越えたであらうが支那語を學ぶ學校は同文書院以外は、東京、大阪の外語と拓大、東方文化學院、康德學院の六校位しかなかつたと思ふ。

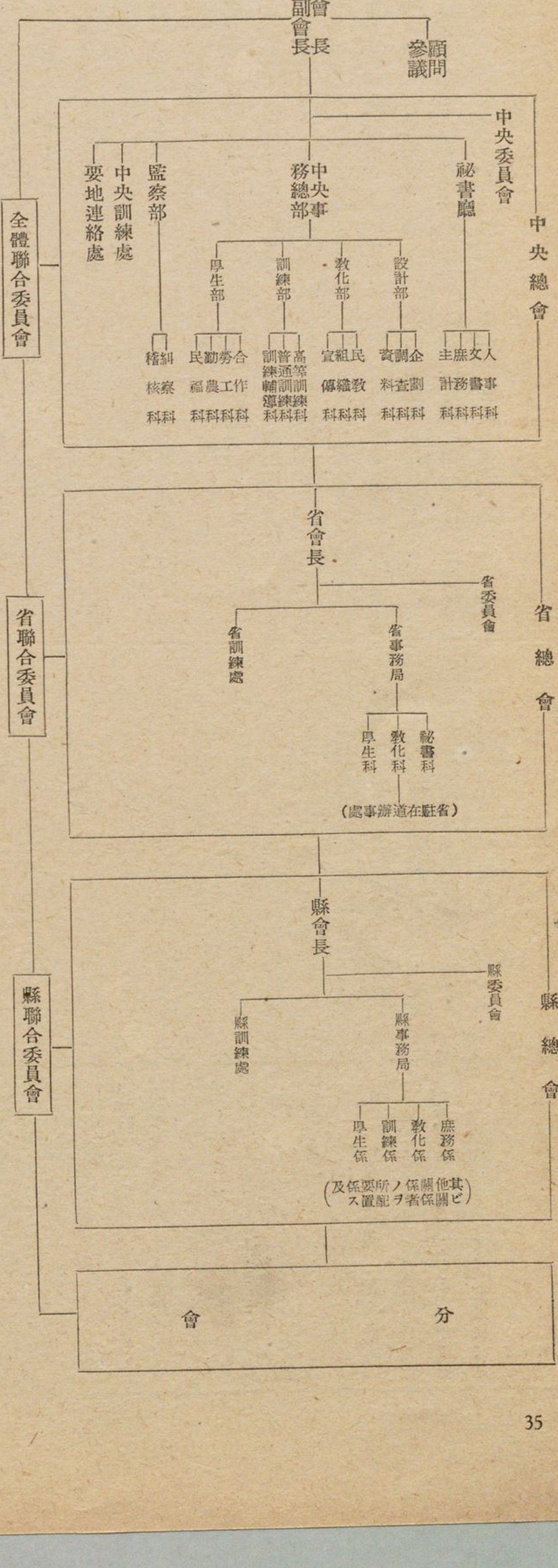
一方支那人も、世界的半植民地の環境に在る事を忘れ自ら中華と自負して既に精彩を失つた文化を誇り、日本人を指して「東鬼人」などと呼び、日本の興隆發展を內心怖れ羨望しながらも排日抗日の態度をずつと續けて來た

然るに滿洲事變の結果が滿洲帝國の建國となり、「民族協和」精神が立國の根本精神として確立され、今迄の喧嘩仲間がどうしても相協和して行かなければ國家の一員として存在を許されない仕儀になつた。

次いで今次の支那事變は世界戰史上稀有な大戰線に戰爭は展開し、忠勇な皇軍は過去二箇年半、膺懲の大戰果を收める一方、再建新支那の誕生に大支援を與へてゐる實狀は本論の初めに述べた通りであり、今事變の結論は、日支人が眞に東洋の運命を相互に自覺して、精神的融合を齎す事にある。新東亞建設の黎明は實に日支兩民族の理解と誠心に立脚する。以上の說明で兩精神の融合を促進するための新民會は日支兩國民が誠心を以て結ぶ國民の道場として理解されようと思ふ。新民會に働く日本青年は上述の認識と心構への下に會組織（別表參照）の一細胞として、民心の把握收攬に沒頭してゐるのである。

日本の武威は流石の支那人も今日では滿喫してゐる。之から與へるものは、日本の誠意である。近衞聲明が如何に權威ある我帝國の態度であると說明されても、說明だけでは納得しない。あの聲明にもられた大精神を事實に卽して顯現する民衆運動が卽ち新民會運動であり、日本青年が中軸的に參加してゐる所以である。

新民會組織表





五原

——二人の尼僧——

立野信之

絶え間ない蒙古風に輕い塵埃だけが取除かれて、自然の美しい肢體を青空の下に晒らしてゐる砂丘の波、それにつゞく沙漠とも砂丘ともつかない砂地の平原、そして突然のやうに平原の中に灌木の林が出現し、運河があり、よく耕された畠や水田までが現はれた——五原城であつた。

我々は雀躍りして入城した。だがその時五原は、敵の所謂「淸野空室」の戰術にあやつられて、住民は一人殘らず逃亡してゐた。どの横丁をのぞいてみても人ツ子一人居ない、全くの死の街である。だが、それにしても何といふ整然たる死の街であらう？ そして不毛の沙漠に取圍まれた一角に、これほど豐饒な可耕地があり、立派な都市をなした街があらうとは？ 我々は、放牧だけの原始的な怠惰な蒙古族に對する漢民族の侵蝕作用の立派な見本を見せつけられたやうな氣がした。傅作義の軍隊が三年に亙つてこの地域一帶に蟠居してゐたのも、ときどき執拗な逆襲を試みてきたあの恐るべき抗戰力も、みなこの五原附近の豐饒な土地から養はれてゐたものだらう。

だが、その傅作義も今は敗戰の浮身を、遠く黄河の彼方へ——零下數十度の凍えた沙漠の中をさまよひつゞけてゐることだらう。すでに、わが軍の快速部隊は黄河べりの濫河にまで突入したといふ輝やかしい報告が、後方の五原に達してゐた。

『わツしや、戰争といふもんを始めて見ましたがね……』

と、この五原作戰に、軍隊輸送のために特に參加してきたトラックの運轉手——華北交通會社の社員——が、防寒帽の間に少しばかり白髪をまじへた短い頭髪を見せながら、眼を丸くしていつた。

『日本の砲の偉力は大したものですな。三發ですな——一發は左、二發目は右にすぎた、と思ふと三發目は此處ぞと思ふ眞ん中へドカンと小氣味よく命中する。馬も人間も空中に飛びあがつて……あゝいふのを繪に畫いたら、つまり戰争繪卷ですな。——しかしそれよりも感心したのは、逃げる住民に對して砲を撃ちこまなかつた事です……この附近の住民でせうが、凍つた河の上を、車に荷物を積んだり、蒲團を丸めて擔いだりして、よた〳〵逃げて行く……ひどいので子供を落してそのまゝ逃げて行つたりしてゐるのが、手に取るやうに見える。部隊長は望遠鏡で見てましたがあれや住民だ、撃つな——といつたまゝ、あとは逃げる敵の軍隊を追つて他の方向へ向はれましたがね……わツしや感心しましたよ。戰争——といつても、これでなくちやいけないと思ひましてね……』

訊いてゐた我々も救はれたやうな、豐かな氣分になつた。

この運轉手は、他の運轉手たちよりも幾らか年取つてるだけに、壯烈な戰闘そのものの場面よりも、もつと他の方面に落着いた眼や心が向いてるやうで、それが我々に好ましく思はれた。

——事實、この年取つた運轉手は五原に入ると、暇を見ては彼一流の見學に赴くのである。

『立派な小學校がありますな。』

と彼は歸つてきて、報告した。

『建物が立派なばかりでなく、敎室内がきちんと片附いてゐて、第一小學校なんかによくある落書が一つも有りませんや。便所を見たら尙よく分るだらうと思つて裏へ廻つたら……何と、男女の別にきちんと分れてゐて、こゝにも落書一つありませんでした。わツしや、すつかり感心して、歸らう、と思つて便所の傍らを通つたら麥藁が敷いてある、何氣なしにその上を踏んだらボコツと穴ぼこに落ちましてね……まつ暗で、何が何やら分らない、夢中で手探りしたところが、梯子に觸つたので、それでやうやく地上に這ひ出た、そこで兵隊さんを呼んで來て、懷中電燈で改めて穴ぼこを探検したところが、何と驚いたことには、穴ぼこは八疊敷位の廣さで、白色レグホンの優秀なやつが二百羽ばかりみんな脚を縛ばられて轉ろがしてある。——わツしや内地にゐた時養鷄をやつた事があるの

で、よく知つてますが、どうして中々優秀なレグホンです。それから穴ぼこには、麥だの、ほうれん草だの、馬鈴薯だの、品評會に出してもいゝやうな穀物や野菜がどつさりしまつてあるのです——わツしが思ふのに、學校に農事試驗場といつたやうなものがあつて、試驗的にいろんな物を作つたり、また凶作時には貧民救濟のためにあてる、といつたやうなものではありませんかな……』

穴ぼこは、年取つた運轉手の報告にまつばかりでなく、警備についてゐる兵隊達からも、そちこちにあることが報告されて來た。愚かしいことには、葱やほうれん草や鷄や豚と一つしよに、女や年よりを隱してある穴ぼこもあつたといふことである。

だが、それよりも私の興味をひいたことは城内にりつぱなカトリツクの教會堂があり、そこに二人の中國婦人の尼僧が逃げないでゐる、といふ報告であつた。私は機關の命をうけて、早速調査に赴いた、といふのは、教會やその他の社會施設を調査報告するのが私の與へられた任務であつたからである。

教會は蒙疆地區のところどころによく見うけるやうな、廣い敷地の中に、數里先きからでも見えるやうな禮拜堂と宿舍と牧場と、そのほか小學校や、小さな病院に相當する施療室等を持つたものであつた。私が這入つて行くと二人の中國人尼僧は白と黑の僧衣をまとつた姿で、禮拜堂わきの居室から青ざめた、おびえたやうな顏つきで出て來た。——一人は年の頃三十二、三歲位で二つばかりになる赤ん坊を抱いてゐ、他の一人はまだ二十四、五のうら若い女性であつた。二人とも美人といふには程遠い顏だちであつたが、つねに心を一方にむけてゐるものの敬虔な美しさといつたやうなものが、その清淨な法衣につゝまれた顏だちにそこはかとなく漂よつてゐるやうに思はれた。

『お二人きりですか。』

と、私は聞いた。

『さうです——』

と、年上の尼僧が低く答へた。

『司鐸さんはどうしましたか』

『奧地へ旅行中です——』

『どこの國の方ですか』

『ベルギー人です——』

それ以上私は根掘り葉掘り聞く必要はなかつた。このへん一帶にあるカトリツク教會はたいていベルギー人の管轄であり、彼等は殆ど三十年も四十年も前に本國から派遣されて來てゐるのだつた。——こゝの司鐸も三十年前から來て布教してゐるといふ。教會のもつてゐる廣大な敷地は、多分義和團事件の際の損害賠償として時の爲政者から提供されたものか、或は買つたものであらうと思はれた。



——私は、その日は教會の建物や施設等を少しばかり覗かせてもらつただけで滿足した。私はクリスチヤンではなかつたが、その廣大で閑楚な建物の雰圍氣に觸れただけで、久し振りに心が洗はれたやうな氣持ちになつて、宿舍に歸つた。

二日程で、私の調査はだいたい終つた。私は引上げねばならなかつた。その頃には、敵の「清野空室」の戰術にをどらされて一人殘らず逃亡してゐた住民も、零下數十度の沙漠の中を住むに家なく喰ふに食なきまゝぼつ〳〵歸りはじめてゐた。皇軍は彼等を庇護した。

五原を引上げるにのぞんで、私はフト教會に殘つてゐた中國人尼僧の賴りなげな表情を想ひ出した。私は歸りの挨拶をかねて、再び教會に赴いた。

二人の尼僧は、禮拜堂わきの居室から同じ姿で現れた。私を見るといくらか親しげな表情を動かした。そこで私は、もうこの地を引上げることを告げ、もう間もなく治安も回復するだらうから皇軍の威力に賴つて安心してゐるやうに——と支那語で傳へた。すると二人の尼僧はさつと表情をかへて、

『どちらへお歸りになるのですか。』

と、熱心な目つきでたづねた。私が包頭まで歸ると答へると、二人は顏を見合せて何やらひそ〳〵話し合つてゐたが、やがて向き直ると懸命な表情で申し出た。

『私達を包頭まで連れ歸つて下さいませんでせうか。是非ともお願ひ致します……包頭の教會で、私達はしばらく靜養したいのでございます。』

その表情には魂を打ちひしがれたも

のの憂愁の色が漲つてゐた。私は重ねて、間もなく五原の治安も確立するから、その必要は無いだらうことを、云つた。

すると二人の尼僧は、肩をすぼめた。『傅作義の軍隊が逃亡する際に御堂を荒らしたのです……その時の恐怖が、私達の胸から去りません。どうぞ私達をお助け下さいまし！……』

熱心な、縋りつくやうな、動かし難い申出であつた。——私は、二人の尼僧の心情を諒解した。

翌日、私は機關の承認を得て、二人の尼僧を保護してつれかへることにした。兵隊たちは私と一緒にトラックに同乘してゐる二人の尼僧を物珍らしげに眺めたり、種々勝手な品評を試みたりした。が兵隊たちは別に惡質のからかひは發しなかつた。

だが、二人の尼僧は馴れない日本兵の視線と銃劍の中にゐるせいか、ほとんど口を利かず身動きもしないやうな硬ばつた表情で、トラックの隅に、身を切るやうな蒙古風に吹き晒されて、ずつと蹲まつてゐた。——年上の尼僧の腕の中には、二歳ばかりの幼兒が毛布にくるまつて、抱かれつゞけてゐた。子供は尼僧の腕の中で安心してゐるせいか、一度も泣き出さなかつた。

折々トラックが停止すると、子供に小便をさせるために、二人の尼僧は交るがはるトラックを降りた。

數時間、寒風を衝いて駛つた後に、トラックは破損した橋梁にさしかゝつた。

『全員下車！』

トラック隊の指揮者がどなつた。トラックに乘つてゐた兵隊たちは、一齊に飛降りて、橋梁修理作業に協力した。そして用心ぶかく一臺づつ通しはじめた……と思ふと、突然作業班の兵隊たちが何やら呶鳴りはじめた。

見ると、三番目のトラックに尼僧たちが、兵隊たちの呶聲にびつくりしてしかし何が何やら譯がわからずに、乘つてゐたのである。私は、さつそくトラックに近づいて、このやうな場合には何人たりとも降りなければならぬこと、それを私が豫め注意しなかつたことを、詫びた。

『おゝ、さうでしたか——』

二人の尼僧は西洋人のやうに癇高い聲をあげて、肯きながら、互ひに助けあつてトラックを降りた。——トラックは一臺づつ橋梁の上を無事に通つた。そして再び全員乘車した。トラックは砂地の平原を走つた。

それ以來、尼僧たちは、私に親しげな、何でも訊ねなければならない——といつたやうな表情を示しはじめた。

夕方ちかくなつた頃、何時間かトラックに搖られてお腹がすいたのだらう。彼女達は手提鞄の中から、パンとソーセーヂと葡萄酒とを出して、私にすゝめた。

『みなお手製です——』

と、若い尼僧がいつた。お手製といつた說明が何となく私の心をなごやかに搖ぶつた。で、私は白いパンの一片に遠慮なく手を出した。すると子供を抱いた尼僧もパンに手をのばしながら

『日本の兵隊さんは、思つたよりもおとなしいですね……怒つても、すぐなほる……どうしてでせう？』

『それは——』私は微笑をうかべて說明した。

『日本の兵隊は單純で、そして善良だからです……』

『あゝ、善良だからですね——』

二人の尼僧は同時に云つて、微笑した。もうすつかり賴り切つた、安堵した者の安らかな微笑であつた。

それを見ると急に私は食慾をおぼえ私と二人の尼僧の間の新聞紙の食卓の上にあるご馳走に、さかんに手を出しはじめた。（包頭の友人A氏の話より）



燃料と農民

みづの・かほる

數年前のことである。北支を旅した日本農學界の一權威者が、その報告の一節に、「北支の地上に遺利無し」と長嘆息してゐるのを讀んだことがある。氏の旅されたのは、作物收穫後の初冬の候であつたので、北支の農地は、地上に生ひとし生ひたるものは一物も殘さず、奪ひ去られた後の情景を眺められたわけである。

試みに、農民の活動を終へて冬ごもれる嚴冬の候、北支の農地に步を運んで見よ。そこには一枝の落穗を探し出すことは困難であらう。又一握の大豆葉を掻き集むることさへ、恐らく容易なことではないであらう。そこにはただ老衰して黄ばんだ地肌が、寒風に曝されてゐるだけである。

さて、農地が收穫後、かくも美はしく清潔にされるのは何が故か。曰くそれは、單に北支農民の勤勉さや、つましき物資愛護の心掛けばかりによるものでは斷じてない。これこそ、耕地の不足による貧窮さが、彼等にさうさせるのである。

先づ作物が刈り取られると、その後から老人や子供が丹念に穗を集めて行く。落花生や甘藷などになると何回となく鋤き起して、一粒一塊といへども見逃さずに探し集める。甚しいのになると、落花生を收穫した後、表土三四寸を耕起して、大きな篩で何日もかかつて篩ふ。まるで地球の皮を碎いて篩ふやうなものである。勿論勞力を見積つて計算したら、とても引き合つた仕事ではないのだが、そこが貧窮な北支の農民である。いくらかの落花生が取れれば、一應滿足を得るのである。

次に作物が刈り取り掘りとられて、收穫物が家に持ち運ばれると、こんどは、部落の貧乏者や農地を持たない連中が、蜘蛛の子を散らしたやうに右往左往、更に一入念入りに落ち穗を拾ひ土を引つくり返して遺利を探ぐる。そして半日もかゝつてやつと一握の麥穗を、數十粒の落花生を拾ひ集めて興じ入るのである。

それから引き續いて、大きな熊手をもつて、あらゆる農地をくまなく掻き廻すのである。枯草、落草、地上のものはおしなべて集められ、地上からはぎとられるのである。これがやがて、貧農の冬季の燃料となるのである。

ところがまだその後に、家畜の放牧が待つてゐるのだ。家畜の放牧は、部落によつておよそ何日からときまつてゐて、農家はその日までに刈り取り運搬を終へる。この日が來ると、春から夏にかけて、柵のうちに狹い天地をかこつてゐた豚や羊が、一齊に廣い農地に解放される。

もはや畑には、何んにも殘つてゐさうにもないのだが、矢張り豚や羊は、人間よりも辛抱強く念入りに探すと見え、日暮れごろには、腹を太鼓のやうに膨らして歸つて來る。かくして人間と家畜によつて、農地には一株の枯草も見當らぬまでに清掃される。

落花生や甘藷栽培の地帶へ行くと、豚が一と冬中鼻先きで畑を突き起して最後の一粒までも、見逃さず拾ひ喰ふのは、この地中の遺利を集めさせて、豚を肥やさうといふ一石二鳥をねらつたものである。

さてまだ作物の根株が殘るのだが、これは農地の所有者が掘り起して、自家の燃料とし、所有者外は無斷で採取をしてはならないことになつてゐる。根株は火力が強くて、燃料にはもつてこいの品であるからでもある。

かやうに北支の農地は、單に食生產だけではなくて、燃料供給地でもあるのである。恰も日本內地の山林の役目までも、農地が負はされてゐるもので、そこに北支農業のなげきがあるのである。

北支は、農產國の美名を冠せられてゐるにもかゝはらず、農家一戶當りの農地分配の狹少から、平年でも北支自體の食糧と、飼料に不足を告げてゐるといふあはれさである。而もその狹少な農地の上に、燃料の生產まで負擔させられてゐるのであるから過酷である。見よ、作物の莖稈の大部分、更に農地に殘つた僅の落葉まで掻き集められ、燃料としてあとかたもなく燃やし盡され、農地から作り出された有機質分は、永久に農地に返される事がないのだ。かうした宿命的な北支の奪掠農法は、年とともに農地を瘦せさせ、生產を低下さして行くばかりなのである。

以上は、北支の平野に就いての話であるが、山村へ行くと、飼料の一部と燃料の大部分を山地から採取する。しかし、北支の山は內地の山々と違つて禿山であるので、山地から採取する燃料と言つても、矮少な灌木や雜草類で

あつて、日本のやうな立派な薪は夢にも考へられない。それでも山村では、平野の山をもたない農村とは違つて、貧窮の内にも何んだかゆとりがあつて、平野よりも割多い家畜が飼育され屋敷には燃料をうづ高く積んで、竈の煙も賑つてゐる。いくら北支の禿山でも、山は矢張り有難い、さゝやか乍らも山の幸が享けられるのである。

平野の農村に於ては、平年でも家毎に充分な燃料は得られない。貧乏人は嚴冬にも溫突が焚けなくて、夜は五六人の一家族が着のみ着のまゝで、一つ蒲團にもぐり込んで寢るものが多い。況んや水害や旱魃で不作の年は、食糧に困るのは云ふまでもないが、燃料の不足にもどれだけ惱むか知れない。北支のやうな寒い地帶では、燃料の貴重さは、敢て食糧の貴重さに劣らない。にもかゝはらず貧乏者には、冬の採煖など到底考へられないといふのだから悲慘の極みである。それどころか、三度の炊事の燃料にさへ、可及的節約が工夫されてゐるのである。

北支の農家の細君が、燃料を餘計に使はないで、上手に炊事をするといふことは、女として誇らしい一つの腕前とされ、これに拙いものは、世帶もちの下手な細君として、屡〻姑の嫁いぢめの種となるほどである。

又さうした燃料の不足を、四六時中見たり聞いたりしてゐるものだから、農村では、三歲の童子もよく燃料の貴重さをわきまへてゐる。四つ五つの子供が野外に遊んでゐても、小さい尺餘の木の枝でも見つけると、すぐ拾つて功名顏に母の側にもつて行く。七つ八つの子供になると、普通の農家なら、小さい熊手を擔がして、枯草や落葉掻きに出すのである。

燃料の採取は、平野でも農地の作物の莖稈ばかりでもない。川の堤、墓場などの雜草、畑の境界、家の屋敷の僅かな樹木からも採る。

筆者は去る年の秋、果樹の多い農村を通り過ぎたことがあるが、子供達が梨の葉を一枚一枚採取してゐるので、なるほどこれは病葉を集めて燒くのであらう。さても感心なるかなと、早合點をしたのである。ところがよく聞いて見ると、何んぞそれは、燃料にせんがために枯葉を摘んでゐるのである。こんどはすつかり寒心して了つたのである。

支那に柴米といふ言葉がある。生活のしろとして、先づさき立つものは柴米といふのであるが、柴は薪で、薪を米麥と並べ稱し、それに米の上に薪を置いてゐるのである。も一つ支那語で月給を薪水といふ。こゝにも薪をもつて來るあたり、ともかく北支の燃料は貴いといふ一語に盡きる。

ところが、かやうに苦勞して、折角集めた貴重な燃料ではあるが、薪と違つて藁屑や枯草は、一度にパツと燃え上つて、誠に心細い火力である。そこで農民は竈や鍋に、百パーセントにこの火力を捕捉利用するやうに工夫してゐるのである。

第一竈が本屋の内にあつて、これが屋内を暖め、その煙道は溫突となつてゐるので、炊事場の火力が採煖に利用され、鍋は又必要以上に大きく、殊に平べつたく出來てゐる。それに鍋底を全部火にあてるやうに据ゑつけてあるので、ものは素晴しく速かに煮える。又日本のやうに一々鍋を下ろさないで煮えたらそれを掬ひ出して、續いて次のものを煮る。從つて飯もお菜も一つの鍋で煮られ、日本のやうな鍋釜の區別はないのである。これも一度ぬくめた鍋は冷やさないといふ算段である。

さても、燃料に乏しき北支に、燃料の貴重な北支の農村に、こゝにも持たざるものの彼等の工夫をこの竈に見出して、筆者は愉快に思ふのである。

×



雨・ぶらたなす・駱駝

古川賢一郎

四月の柳がうすみどりに芽ぶくころ、人々は漸くほんのりと春のこゝろに染まる。そしてほの白い山櫻桃、あざやかに黄ろい連翹、さては桃花、杏花と季節はなまめき、夢のやうに柳絮が紛々とみだれ飛ぶかと思ふと、五月に入る。もう大陸は初夏の匂ひでいつぱいである。そして

春盡楡錢堆狹路
曉陰花雨作輕寒

とある楡錢が道々をうづめつくし、霏霏として五月の雨が降る。

雨では北京・前門外の夜の雨が美しい。濡れた商家のさま〴〵な華麗な色が、灯に輝いて妖しいほど生々しく、埃は地下へ、騒音は家深く逃げこんで、たゞ暗い空からは、無數に銀箭の雨がアスファルトを叩くばかり。はつ夏の夜雨けむる前門大街、濡れて歩くとなにかやるせないこゝろになる。

きい〱と胡同の音樂
たゞよふは羊肉を燒く匂ひ
あれ〱死胡同のおくふかく
障子にぽつと灯のあかり

○

雨と云へば京漢線の石家莊の初夏。雨に降りこめられた、退屈な宿の夢から醒めた或る朝、私は食膳に向つてほう！　と思はず聲を上げた。小皿に盛られた「たにし」の煮付に驚いたからである。

芭蕉の「飯貝や雨に泊りて田にし聞く」の句を思ひ浮べつゝ、女中さんに尋ねると

『さあ、何處からくるかしらん、市場で買うたとでしよ』

と、私はにべもなくやられた。それでも宿を立つとき洋車の上からもう一度、見送りのきれいな女將さんへ聞いて見た。

『さあ、土地のものかどうか、わたしよく存じませんけれど』

と美しい齒並を見せて、水々しく笑つたのに、私はとりつくしまもなく、物忘れしたやうなおもひを抱いて、洋車の雨衣の中へ隱れたのである。五月の雨の日、美しい女の白い齒なみ。畑には麥が青々と一尺ばかりのびてゐた。

○

街路のアカシアも槐樹もすつかりみどり葉をこゆくして、公園へ行くと新綠の下を、若い姑娘たちは、頰をぽつと合歡の花で染め、裾も袖も短い支那服でぴつたりと身をつゝみ、淸麗な若いエロチズムをたゝへ、はつ夏の人魚達、眞晝はもう涼傘さへもつてゐる。そして老柏樹のもと、茶を呑む人々が籐椅子に頭を列べると、氣早い氷結凌に奶油鮮洋梅の招牌さへも出はじめるのだ。

○

五月になると、私は景山前に日參する。アスファルトの變哲もない街路であるが、兩側の長い朱の壁が五月の陽を吸つてあたゝかく、遠く三座門の目も綾なる牌樓や、碧空へ斜めにそり返つた綺望門、神武門などの、琉璃の甍を見つゝ、この通りの街路樹・篠懸木の淡い花をたのしみにゆく。

朱の壁を背景に樹は大きな葉の群れを空高くさゝげ、その間に薄い黄綠色の花をのぞかせてゐる。その下のせまい步道を、あざやかな淺黄色の支那服を着た、おしやべりな姑娘達が、裾をけつて肩を押し合ひながら濶步する。私はこちらの壁にもたれ、たゞじつとしてゐるだけでこゝろ樂しい。高い朱の壁とぽつんとある篠懸木――繪の構圖にもならないし、寫眞では朱の壁が黑つぽく陰氣になるだらう。私は朱の壁と篠懸木の花の、晝と夜の詩を作りたい計畫で、五月の陽あしを忘れ、毎日犬のやうに樹の下にたゝずんでゐる。

○

紫禁城の大手門、天安門の琉璃の甍が五月の陽光を受けて、もう燃えんばかりに輝き聳えてゐる。その前を流れる金水河、此處ではこれからよく中國人の投身自殺がある。この河には大理石の五つの橋が列びかけられ、龍の浮彫が美しく、晝間は白い石が眼に痛いほどまぶしい。又その前の槐樹と合歡の街路樹の林の中を、駱駝の列がカランコロンと鈴を鳴らし、大きなゴムの足で、ぼさ〱と石だたみの都大路を踏む。この悠々たる田舍者は、電車や自動車が通る毎に、申譯けみたいにネエ〱と細い聲でないては、ぽろぽろと可愛いうんこを落して行く。みんな毛を刈りとられ、光身になつた五月の駱駝。いや、せい〱しますわい、と重い首をもたげてうそぶいてゐる。

娘娘と藥王

—北支春の二大廟會—

石原巖徹

陰曆四月は滿洲と同じく北支の廟會月である。この四月の廟會の特徴は、（一）娘娘と藥王の祭が多いこと（二）信心の外に行樂の意味があること、であり、娘娘と藥王の民間信仰に於ける特色は、どちらも道教的に現世の肉體に關する幸福を目的とすることである。肉體に關する幸福といふ意味は、積極的には無病息災或は子寶を授かることであり、消極的には病氣を治すことである。娘娘廟の本尊は殆ど例外無しに碧霞元君（天仙聖母、福壽娘娘等の俗稱あり、北支に於ける女神の最高峰、正體に就ては諸説紛々一定せず）を眞中にして左に眼光娘娘、右に子孫娘娘の三體がある。碧霞元君は總體的に無病息災從つて健康長壽を司り、又一般の病氣平癒を管掌する。眼光娘娘は眼病治癒を司り手に眼玉を持つてゐる。この特に眼科だけに專門の神樣ができてゐる點は、如何に北支滿洲の民衆の間に眼病患者が多いかといふことを證明するもので甚だ興味が深い。子孫娘娘は赤ん坊を抱いてゐる神樣で、無論子寶を授けるのが役目である。

藥王廟の本尊は藥王爺で、その正體に就ても種々の説があつて一定しないが、唐代の名醫孫思邈説が最も多い。これは一般的に治病の神樣である外、藥種商の祖師（守護神）でもある。

北京に娘娘廟は、東西南北五箇所にあり何れも頂の字を附してあるが、現在廟會の行はれてゐるのは西頂と北頂だけで他は廢廟となつてゐる。然しこの五頂の娘娘廟は昔から大して問題にならなかつたもので、北支第一從つて支那第一の盛名を謳はれてゐる娘娘廟は金頂卽ち妙峰山である。妙峰山は北京の西北約百三十支里の處にあり、毎年陰曆四月一日から十五日間に亙つて盛大なる廟會が行はれ、北京市中はもとより近郷近在の善男善女が先を爭つて參詣進香すること、滿洲大石橋の迷鎭山に劣らない。こゝの特色は上記三體の本尊の外に、後から追加された王奶奶といふ女神が別格として一殿に祀られてゐることである。奶奶はお婆さんの敬稱で娘娘より位は低いが、同じく治病の神樣として香火の盛なる點むしろ本尊を凌駕するといはれる。事變後この一帶が匪賊のために荒されて治安不良のため廟會も殆ど停止の形で、昨年は北京へ出開帳をやつたが、もともと行樂を兼ねての山登りがこの廟會の人氣のある所以であるから、全然問題にならなかつた。早く治安が回復してこの北京人にとつて隨一の行樂的年中行事が元通りにできるやうになることを望む者決して筆者一人ではない。

妙峰山に對立してこれに勝るとも劣らない盛況を呈するのが天津南郊の藥王廟卽ち通稱峰窩廟の廟會である。廟は天津を南に距る約三十五支里靜海縣峰窩村に在る。廣漠たる河北平野の麥畑に建つてゐるので、妙峰山の如き山登りの興味や風景には惠まれないが、傳統の威力は恐るべきもので、陰曆四月十六日から三十日に至る開廟期間、京山、津浦兩沿線一帶の民衆がひつきりなしに參詣し、就中天津との間三十五支里の街道は人馬織るが如き壯觀を呈する。この廟會の特色は虔誠と稱し線香を捧げて五歩に一跪、三歩に一跪といつた進香法を以て肉身の者の病氣平癒を祈る風俗のあることで、これは恐らく他處に見られないものであらう。この廟には藥王の外道佛儒三教の主要諸神がデパート的に祀られてゐる事も興味がある。無論眼光娘娘もある。

支那建築の話

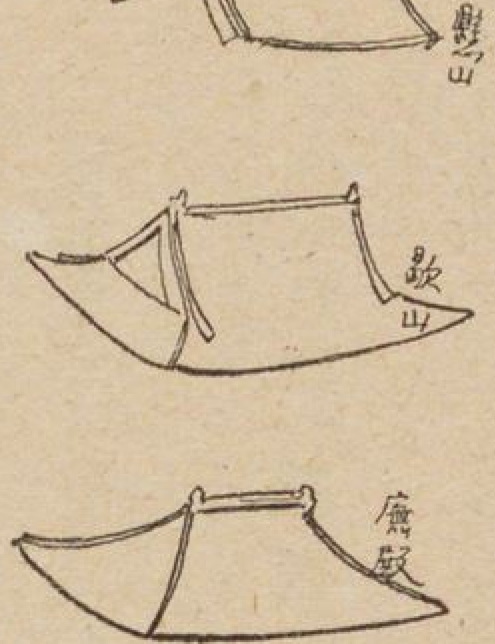
屋上の怪物など

村田治郎

屋根の形は一寸思ふと實に千差萬態のやうな氣がするが、よく見ればそれほど澤山の種類はない。中で最も多い形は、

日本名	支那名
切妻(キリヅマ)	懸山、硬山
入母屋(イリモヤ)	歇山
寄棟(ヨセムネ)、四注(シチユウ)	廡殿

などである。



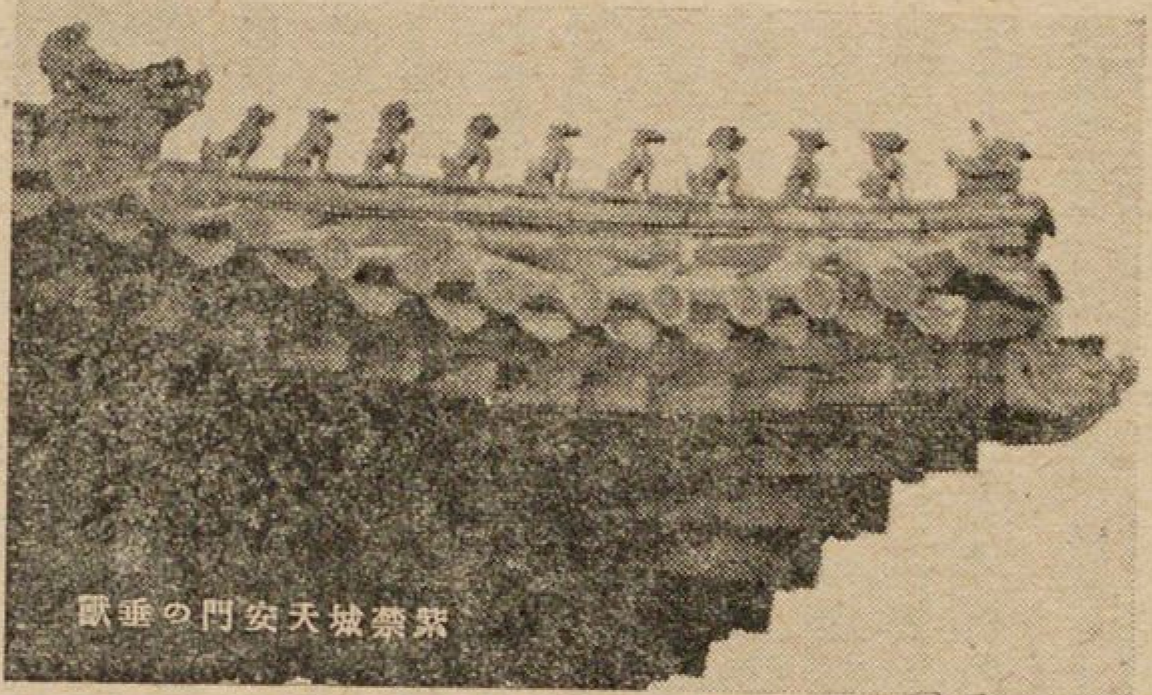
屋根の形

西洋風の建築が入らなかつた頃までの日本建築では、切妻は一種に限つてゐたが、支那でも或は同じことが言へるのかも知れないけれども、とにかく今では二大別される。一つは側面の壁から屋根の方が少しそとへ出てゐるもので、それを懸山とか挑山といひ、他は側面の壁の表面のところで屋根も終つてゐるもの、それを硬山と呼ぶ。前者の方が支那建築本來のものらしく、古い建築とか宮殿とか寺觀などのやうな立派な建築に多く、後者は近頃の建築、特に一般の住宅に普通使つてゐるのである。

屋根の形にも格式がある。日本で寄棟といつてゐるものを支那では廡殿と呼ぶやうに、實際これは宮殿などの最も重要な廡・殿に用ゐる。北京の多くの寺觀でもこれを使つてゐる例はほとんど稀なのを注意すべきだ。これにつぐのが入母屋の形で、この手のものが北京の寺觀には最も多い。一番低い格式の屋根は切妻であるから、普通住宅に用ゐたわけである。もつとも北支那にはカマボコ屋根などと日本人が呼んでゐる平房(ピンファン) 即ち泥づくりの平たい屋根の民家が多いが、もちろん是は最も低い階級といふべく、格式外のものなのである。

屋根の頂上の部分を日本ではイラカとかムネなどと呼び、平たい瓦を幾つも積み上げて一段高くしてゐるが、それと同じやうな一段高いものが、屋根の傾斜面に沿うて四隅の附近まで達してゐるのが、寄棟とか入母屋の屋根で見られる。その時は頂上のを大棟 =オホムネ、四隅へ行つてゐるのを降り棟 =クダリムネ などといひ、支那でも前者を正脊、後者を垂脊と呼ぶ。

ところが日本では一寸見たくても見られないものだが、支那には大棟がなくて頂上のところが圓くなり、屋根の斜面が前から後へと、なだらかに連絡した特殊なものがある。それを捲棚というが、入母屋とか切妻の屋根に多いやうである。捲棚は儀式ばつた所の正殿とか寺觀の大殿には用ゐず、少しくだけた場所とか風流な建築に好んで使はれてゐる。


紫禁城天安門の垂獣

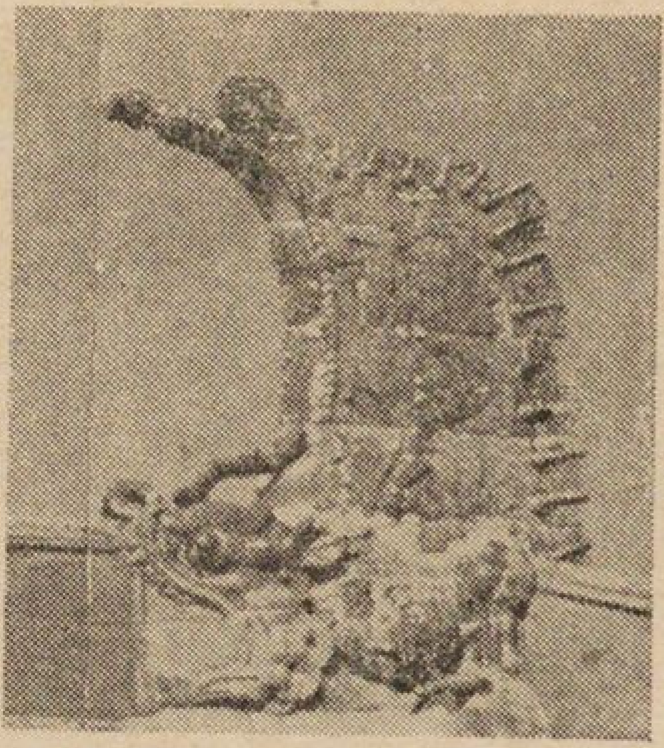
◇　◇

大棟と降り棟との端には奇妙な獸類または魚類の頭がついてゐる。大棟の兩端のを正吻、降り棟の下方の端のを垂獸などと支那ではいつてゐる。これらのものは日本で殆んど用ゐてゐないが、しかし日本では正吻のところに鯱魚の形を置いた例が近世からあらはれた。支那でも正吻のやうなものは餘り古くからではないらしく、はつきりしたことは未だ言へないが、まづ宋・金時代ころから以後に多くなつたのであらうかと思ふ。尤も吻または鴟吻といふ名は唐代頃の文獻から出てくるのであるが。

大棟の兩端のやうなところには、何か飾りを置かうとする傾向が起るのが當然であるから、後漢時代ころには兩端に三角形の突出をつけはじめた。それが次の魏晉南北朝時代になると更に發展して、鴟尾 =シビ といふエタイの知れないものとなり、唐時代などでも非常にひろく用ゐられたものである。大同雲崗の石窟にある佛殿彫刻の大棟についてゐる半月形のものがそれであ

り、同様の例は随分多い。

鴟尾は南朝鮮の新羅時代の古蹟、及び我が奈良や京都の遺跡から早く實物の破片が發掘され、北滿の渤海國首都古蹟からも見出されてゐるが、その上に日本では奈良時代のまゝのものが、唐招提寺の金堂の屋根にのこつてゐるのである。日本では、神主さんのはく木製の靴に形が似てゐるので、鴟尾のことをクツガタとも呼んだ。クツの形の表面の鱗のやうでもあり、又羽毛のやうでもあるものが彫つてあるのと、何にも彫つてないノツペリしたのとがある。どちらにしても、何の形をまねて造りはじめたものか、本家の支那で昔から判らなかつたのだから、今になつては一層、説明がつかない。しかし、これが火事などの災害をよける爲の魔よけを意味してゐたことは、推察に難くない。



遼金時代の鴟尾



明清時代の正吻

鴟尾には最初頭の形がなかつたが、そのうちに大棟の端を呑むやうに大きな口をひらいた顏面の彫刻がつき、尾が魚のやうになつたのがあらはれて來た。それは遼時代のものに好例があるから、唐代末期ころからの流行だらうと思ふ。それがもう一段すゝめば大同などに多い蛇がからんだやうな複雑な尾になるのもあつたわけだらう。

北京の宮殿その他の正吻は大多數清代のもので、昔の鴟尾から見ると随分變つてはゐるが、遼とか宋とかのものから見れば、昔の名残りが十分認められる。

日本では鴟尾がすたれて鬼瓦が用ゐられたが、支那には日本式の鬼瓦がないやうに思ふ。

降り棟の端に小さな彫刻瓦が立てならべられるのも、日本では普通見られない光景だらう。これにも大體ならべる順序がきまつてゐて、一番先頭に鳥の背にのつた仙人、次からは獸や鳥がひざまづいた姿になるが、それは龍・鳳凰・獅子・麒麟・天馬・海馬・魚・獬・吼・猴の順だといふ。小さな建築のときには龍から獅子や麒麟くらゐまでだが、宮殿の大きな建築、例へば紫禁城の午門などになると九つか十もならんでゐる筈である。こんなものを並べはじめたのは、いつ頃からか明かでないが、さう古いことではなく宋末ころからかと思ふ。

◇　　◇

屋根瓦は宮殿のやうな古風なものでは、まる瓦とひら瓦とを交互に葺く方式をとつてゐるが、普通の住宅などでは、小さなひら瓦のやうな形のものを用ゐてゐる。支那では、前の葺き方を大式、後のを小式といひ、大式のまる瓦を筒瓦、ひら瓦を板瓦などと呼んでゐる。

もちろん大式が昔からの葺き方であり小式の方が近世の流行で、且つ格式から言つても低いのである。小式のときには大棟の端の正吻などもなく、俗に蝎尾と呼ぶやうに尾をピンとはね上らした形の瓦製のものが置かれる。



北京の釣

宇澄朗

四月下旬の日曜の午後四時頃。

春にありがちな黄塵萬丈の蒙古風も忘れたやうな朗らかな日であつた。

中海西岸の夏になると屋形船が出る渡場の附近で、私は今までついぞ一度もやつたことのない錘り釣で今年初めての鮒釣をやつてみた。

來てから一時間半程の間だが、それでも大は目の下八寸、小さいので五寸位の鮒を七匹あげた。ただよこ好きで實は下手くそな私としては、自分ながら微笑ましい成績であつた。

厚い氷の下でまれな寒さの冬を越して間もないのに、どの鮒も肉づきはまるまる肥つて、鱗の色の艶々しさつたらない。これでアライを作つたらと喰ひ意地の張つた私はもう喉が鳴る。

◇

眺むれば、左手四五丁ほど遠くに玉蝀の大理石のメガネ橋、橋のあなたは北海、森の小山の喇嘛塔が雲もない紺碧の空にくつきりと聳ち、右手は弓のやうに迂曲した中海の湖畔にシダレ柳の大並樹、その綠の茂みから勤政殿の壁が褐色の肌をみせ、湖を隔てた向岸も一面の森、その上遙かに景山の頂きの黄ろい琉璃瓦が春の陽にキラ〳〵光つてゐる。

湖には氷解けの澄んだ水が滿ち盈ちて小波の小皺だになく、蓮の葉もまだ伸びやらぬ廣々とした鏡の如き水面。

この中海を中にはさんだ北海と南海この三つの水と森の公園の位置は、東京でいふとまづ丸ノ内に當る。

自ら畫中の人となつて、喩へやうもない壯麗な景色の展望を恣にしながら不忍の池の幾倍もある湖のほとりで靜かに絲を垂れ、鮒も鯉も鰡もポン〳〵あげ得る釣場を中央部に有つた都會が何處の國にあらう。

◇

竿は二間半、絲の長さは五尺、上半は支那製の絹絲、下半はテグス、鉤の上五分位の處に重ための嚙み鉛。

餌はミミズ。馬糞紙を水でほぐして水をきり、それを小さな植木鉢に入れ其中に生ミミズを入れて置くと、ミミズの色が緋のやうに赤く綺麗に變りその上筋がたいへん強靱になる。これは鮒のつきが素晴らしくいゝ。香餌とはこれを謂ふのであらう。

鉤にこのミミズをつけて、靜かに葦や蓮の根元あたりにそーツと下ろす。魚がゐれば、いきなりガブと呑んでグツと強くひく。合はせる。竿をブルブル響かせ、しなはせて大きな鮒があがる。下ろして喰はなければ次ぎ〳〵に場處を變へてゆく。

好きなウキ釣にはまだ時機が早いといふので、私は初めてこの錘り釣をやつてみたが、釣れるには釣れるけれども、閑寂にひたつて無想のうちに唯だ一念ウキの跳るのを眺める樂しみには缺けてゐる。

◇

北海も中南海も、魚の繁殖はたいしたものだが、大事變以後日支の遊覽客が遽かに激增して湖畔が騷々しくなつた上、殊に北海はボート遊びがあゝ盛んになつて來ては、いゝアナを見つけない限り昔の樣には釣れなくなつた。

中南海の方は、北海に比べると、まだまだ至る處これ釣場といつていゝ。

しかし、北京で本當にいゝ釣場といへば、西直門外の俗に三貝子花園といふ農事試驗場の池に如くはない。

大きな池が三箇處あつて、その三つの池をつなぐ幾筋かの小川が程よく迂曲して流れ、川幅は三四間、藻のぐあひ、足場のよさ、そして魚が實に多く夏になると尺餘の大鮒がよくあがる。

眺めは北海や中南海の美しさには及びもつかないが、何處で啼くかクイナ郭公の聲の靜かさ。北京の夏の靜寂なウキ釣の樂しみは、蓋し此處にとどめをさす。

◇

北海にも、中南海にも、また三貝子花園にも、鰡が多い。二尺ものなんか珍しくない。そしてまたよく釣れる。

鰡釣の餌は、何んといつても小蛙にこすものなく、ミミズならばうんと太いやつ。

ウキを使はず錘り釣で、なるべく岸に近い水草の茂みを選んで下ろす。此魚は餌をあさりに水の淺い岸邊近くにやつて來るものである。

鯉も相當居るには居るが、こいつは容易ではない。雨あがりの日などに私は鮒釣のお景物に六七寸位のをちよいちよいあげたことはあるけれども、本當の鯉釣はまだやつたことがない。

鯉釣といへば、東京外語の宮越賢太郎さんが、北京留學時代、三貝子花園で二尺に餘る大物を釣上げた痛快な記憶が殘つてゐる。

可園雜記

加藤新吉

このごろ故内藤湖南博士の支那繪畫史を讀んで居る。讀んで居るといへば「この書は何時も讀んで居るといふべき書、讀んだと片附けられる書ではない」といふ意味のことをケーベル博士がエツケルマン著「ゲーテとの對話」に就て言はれて居たかと思ふ。が私の支那繪畫史に於ける場合は、恥しながら隨分前に讀み始めて中絶また中絶まだ半にも達しないのである。

面白くないからかといへば決してさうではない。特にその初の方だけでいつても、漢の畫像石は山東から出て當時の都長安からは出ない、繪畫藝術の最高潮は後漢の初で其後、唐の呉道子が畫風を一變する迄甚しい變化はなかつた、玄宗は朝廷の厩に四十萬匹を養つた程の馬好きで馬の繪が一變した、唐の人物畫家は婦人の耳の根を朱の隈で畫いた、唐末の大亂で軍人土匪が跋扈すると着色畫が衰へて水墨畫が流行した、寧宗以後の南宋畫は妙に部分的に片寄つた景色を好んだ、正面向の人物を畫く傾向を生じてから宋の肖像畫は衰へた、などといふ斷片的な記述からだけでも私はいろいろ教へられ考へさせられたのである。

しかし、支那繪畫に就て殆んど纒まつた知識も素養もない私にとつて、此書を讀むことはかなり骨の折れる仕事である。舊來、漫然と讀み散らし見散らしたものを此書で一通り系統づけようといふ野心、畫風や畫家に關する一通りの智識もこれで持ちたいといふ慾の深さ、それやこれやが患となつて、實は無駄骨ばかり折つて居る。それに加へて、他の仕事や讀みものゝ爲に、どうかすると十日も二十日も中絶する結果は、いよいよ理解を困難にし、こんな調子だと果して何時終るものやら判らない。

昨夜もどういふ譯か急に同じ著者の燕山楚水が讀みたくなり、繪畫史を怠けてその方を讀んでしまつた。この書實の名は禹域鴻爪記、博士が明治三十二年初めて支那に遊ばれた折の旅行記書肆博文館に依つて、燕山楚水といふ表題の下に翌三十三年に出版された。

私は最初これを大連の古本屋で買つて讀んだ。それが大正九年か十年、爾來何度か拾ひ讀をするのであるが常にその識見の高さと紀實の確かさに驚く。

> 明治三十二年といふ歳は、いかなれば吾にはいとも怱忙を極めたる歳なりけん。三月十二日の宵といふには思ひもかけぬ隣家より火出でゝ、吾が小石川の假居は瞬くが間に烏有と爲しつ。

これはその冒頭である。月日など曾て氣にとめたこともなかつた私は、今度はひどく不思議な氣がした。といふのは昨日がたまたま三月十二日だつたからだ。

だが不思議はそれのみにとどまらない。手近に在つた博士の支那論を出してみたらその序文が大正三年三月十二日になつて居る。博士の著述及遺稿の出版されたものをいろいろ讀ませていただいては居るが、つひにその謦咳にも接し得なかつた私は、支那論の序文が書かれるに際して三月十二日が特に意識されたものか、それとも單なる暗合であつたかを知らない。ただ思ひもかけぬこの機會は、私にとつては、何となくその儘に過ごし難く思はれるまに、絶えず其著を通じて啓發を與へられつゝある先覺に對してひそかに敬意をさゝげたのであつた。

傳書鳩

綠の大陸目指し黄土に挑む大植樹戰

老大な北支大陸の綠化工作こそ世界に誇示し得る日支兩民族の强力なる意志の表現であると云ふので——華北産業科學研究所、華北交通會社、その他中國側關係機關を中心とした綠化運動が行はれてゐる。まづこの目的遂行のために默々と研究を續けてゐる華北産業科學研究所では昨年以來、北支における惡質な在來の樹木のほかに大陸造林に適する樹木の選定に手を染め、北支の氣候風土に合ふ日本、朝鮮、滿洲の有用樹種、即ち長野縣産の信州カラマツ、群馬縣産の赤松、黒松、スギ、朝鮮からは朝鮮カラマツ、朝鮮モミ、滿洲からは奉天産のリギタ松、吉林産のヤチダモなど廿七種を選んで、昨年春北京西直門外の專屬農場に播種したが、大體良好な成績を見せ數十萬本がすく〳〵と成育してゐる。一方華北交通會社資業局では永定門外に新設した八十町歩の苗圃のほか太原、大同、豐臺、天津各地に新設した何れも百町歩内外の苗圃に、これも大體前記の樹種の大量育成を計畫してゐる。また北京市當局では事變以來手入れの行きとゞいてゐなかつた天壇、先農壇、日壇、月壇など市内四郊に分散する九苗圃の積極的な整理を行つて、これら苗圃から送り出される年々數百本の樹苗を、それ〴〵關係方面に分配することになつてゐる。この大陸綠化運動に參劃するものは、各鐵道愛護村の中國側青年男女、華北交通從業員、北京、天津、濟南、青島、太原、厚和、大同など各地の民團、民會を主體とする民間團體および各學校の上級生徒など數十萬の勞働奉仕であり、北京近郊においてはまづ西山の綠化五箇年計畫によつて先鞭をつけられる豫定であるが、この綠化運動の成行きは各方面から多大の期待が懸けられてゐる。

愈々始る三千萬圓の建設工事

總工費三千餘萬圓をもつて行はれる今年度の華北における各種建設工事は愈々近く春陽に崩立つ大地に力强く鍬が入れられることとなり、政府建設總署では資材の整備と勞力の動員に大童の準備を進めてゐる。先づこの大建設事業のトップを切るものは北京、濟南間を走る冀中平野縱貫道路を固安附近の永定河で結ぶ延長三百メートル、幅員六メートルの固安橋の架設で、このトップ工事に續いて行はれるものは、天津附近の水害に備へるため、渤海灣に注ぐ放水運河を天津南方へ開鑿する工事で、これには二百萬圓が計上されてゐる。また永定河、子牙河、白河、滹沱河などの各河川改修が行はれる。この治水工事は、華北一億農民を水禍の苦しみから救ふものとして期待されてゐるが、その工事費は實に一千餘萬圓に上る豫定である。更にこの治水と相前後して、北支の大地に縱横無盡に伸ばされて行く一千萬圓の道路開鑿工事もスタートを切る。この三千萬圓に上る老大な大工事を一手でやると云ふ建設總署では物すごい張切方で、華北の春は建設總署からといつたやうな嬉しい建設譜を奏でてゐる。

赤い領事館淋しく閉鎖

特殊防共地域の首都、張家口の一端に赤旗を掲げ「赤い領事館」と呼ばれて不氣味な横顔を示してゐたソ聯領事館は、三月の初旬突如として閉鎖された。「赤い領事館」の最後の主コトフ領事代理夫妻は淋しく北京へ引揚げてしまつた。同館は昭和九年開館されて以來國民黨の親ソ政策の波に乘り極東赤化の暗躍外交を續け内蒙、熱河、察哈爾山西、河北と廣大なる地域にその觸手を伸してゐた。然るに事變以來結成された日滿支蒙の固い防共の波に抗しかね次第に退嬰、最近では在留ソ聯人及び通商上の業務も皆無となり、遂に閉館に至つたので、蒙疆地域内に湧き上る高らかな建設の響と、敗退の白旗を揭げて引揚げるものとの明暗二筋の皮肉な姿を示してゐる。

天津・邯鄲間待望の運河開く

長い冬眠を終つた北支の各運河は急激な氣溫上昇に忽ち結氷明けとなり、三月一日からは華北交通の子牙河、南運河、薊運河の汽船運航が開始され、民船による大淸河の運航が開始されるなど活氣を呈するに至つたが、三月十三日からは更に子牙河の未開航部分と釜陽河間、即ち天津—邯鄲間約三八〇キロの運航調査が軍當局指導の下に開始された。一行は邯鄲から各部隊の殘敵討伐戰に追隨して下航し四月上旬に天津到著の豫定である。この運河が運航可能となれば、磁縣地方の石炭を始めとして鐵道沿線に遠い運河沿線の特産物——棉花、落花生その他農産物の出廻りが旺盛になるものとして大いに期待されてゐる。

愛護村に知識の〝光〟

鐵道と民衆との完全提携による新支那建設を目指してゐる華北交通會社では、今度、同社營業線全沿線に亙る六千七百箇村の鐵道愛護村に〝愛路塾〟

を開設二千九百萬の村民の智德啓發涵養に乘り出すこととなつた。教育內容は家庭常識に主眼を置き同時に政治、經濟、產業各方面の知識を植ゑ込み、あはせて村民の思想善導に努力しようといふもので、驛長や警務段員の指導で、產業、一般農業、副業、愛路、日本語などの各課目が開講される。先づ主要都市に對し三月上旬から開設、漸次、全沿線に及ぼす筈であるが、同時に各愛護區ごとに〃愛路文庫〃も設ける豫定で、民衆と直接手を繫ぐ同社のこの劃期的な試みは、民衆教育に對する大きな貢獻として各方面に注目されてゐる。

漸く世に出た 王莊溫泉場

北支における溫泉は北京郊外に僅か一箇所あるだけで、溫泉の好きな邦人にとつてまことに惠まれない土地であつたが、最近、京山線の秦皇島郊外に立派な溫泉のあることが判り、北支の邦人達に大きな話題を投げかけてゐる。同溫泉は王溫泉と稱し、秦皇島の西北二十キロの地點に在り、背後に峨峨たる青山黑山を控へ、遠く南方に渤海を望み、前面には耶馬溪のやうな山を配し、且つ清流湯川にのぞむのどかな溫泉郷である。溫泉のある場所は溫泉場とも稱し、現在の小規模な施設は民國十一年に行つたものらしいが、約四百年前、明朝時代に海南觀世音大日如來を祀り、病者に藥湯を與へた所と云はれてゐる。現在も藥王廟と唱へ、毎年舊四月廿八日には祭りがあつて賑ふ。

泉質はアルカリ性、溫度は攝氏卅八度であるが、ボーリングを行へば、六十度まで昇る可能性があるといふ。湧水量に就ては、未だ嚴密に調査されてゐないが、何はともあれ、將來、北支の邦人にとつて樂しい保養地となるであらう。

青島の東海飯店愈開業

風光明媚な膠州灣頭に立體的な偉容を誇る東海飯店を五十萬圓で買收した華北交通會社は、その後改裝を急いでゐたが、愈々六月一日から開業することに決定した。

同ホテルは大陸一を誇る七階建の堂堂たる建物、屋內には大ホール、食堂、娛樂室その他の設備が揃つてをり、特にホールなども防音設備があり、地階から七階までは青島唯一の大エレベーターもある。更に客室は全部窓をあけなくても、海が見える素晴らしい構造で、屋上には附近の風光を鳥瞰し得る展望臺もあり、ミナト青島の名物の一つになつてゐる。なほ同ホテルは事變前一泊最低二十圓から最高八十圓といふ豪勢な部屋代であつたにも拘らず、毎年夏期以前に全部豫約濟みになるといふ凄い人氣のあつたもので、今後華北交通會社がこれに對して如何なる經營方針をとるか、各方面から注目の的になつてゐる。

聖戰下の日本へ 愛護村長を派遣

華北交通會社では興亞の線に沿うて大陸交通の完成に協力し日夜鐵道愛護に精進しつゝある愛護村民二千九百萬の中から、模範村長十六名を選拔、皇紀二千六百年の佳き年に際會した戰時體制下の日本に派遣し、つぶさに躍進日本の現狀を認識させることになつた。

この「華北交通愛護村訪日視察團」は北京、天津、張家口、濟南、太原の各鐵路局管內からそれ〴〵三名、徐州鐵路辦事處管內から一名、合計十六名を選拔し、四月十日、北京を出發、陸路、滿洲朝鮮を經由、博多、熊本、別府、大阪、京都、名古屋、東京の各都市を歷訪するは勿論、各地においては神社、佛閣、學校、農事試驗場、模範經濟更生農村、農場、牧場、養鷄場なども視察する筈で、特に東京では宮城を拜し、陸軍省、農林省、興亞院、議事堂、帝室博物館、大阪では造幣局、株式取引所等を訪れ、また日本のデンマークといはれる愛知縣の安城町では、村民と親しく懇談會をも開き、歸路は神戸から海路、大連に上陸、奉天を經て、五月四日北京に歸來する豫定である。

音樂の日支親善を新民會で計畫

音樂藝術によつて日支の親善を深めよう――と云ふ計畫はかねがね當局者の間に宿題となつてゐたが、今回新民會天津特別市總會教育會の手によつて音樂研究會を組織し、支那國樂と日本音樂及び西洋音樂を研究して正しい音樂藝術の發達を圖り、之によつて新民精神の發揚と且つ日支親善に貢獻しようと云ふ朗らかな計畫が進められてゐる。

教育分會は中國側教員で組織されたもので會員は二千餘名に上り、直接教育に携はる人々だけにその兒童に與へる影響は大きく、尙一方新民會の日語學校では已に正しい日本の民謠を教材に用ゐて居り、支那側の中小學校でも最近日本の唱歌を採り入れつゝある折柄、今般の音樂研究會の設立は大いに期待されてゐる。

讀書鳩

北京こよみ 五月



五日（舊三月二十八日）

▽東嶽廟撣塵會最終日・朝陽門外にあり、舊十五日から開廟中で今日は最終日に當り特別に賑ふ。この日は御本尊東嶽大帝即ち泰山の神の誕生日として、民間多く香會の隊を組んで鼓樂を奏し旗幟を押立てて神を迎へに行く。見物である。

七日（舊四月一日）

▽萬壽寺開廟・西直門外六支里にあり開廟十五日間。明の永樂年間の築造で大規模である。

▽西頂（娘々廟）開廟・正名は廣仁宮。萬壽寺の西方八支里藍靛廠にあり、開廟十五日間。廟市が立つて田舍びた賑ひを呈する。

こゝの山門の四天王像は嚴しい。廟に七十二司の神があるが、東嶽廟の

▽戒臺寺開廟・蘆溝橋の西北二十支里にあり、潭柘寺と近い。開廟十五日間。唐の武德年間の築造である。

▽碧雲寺開廟・西山にあり、開廟十五日間。五百羅漢を祀つてゐる。その彫塑の妙見るべきものあり。こゝの五寶塔の中に北京で客死した孫文の遺骸を、南京の中山陵が出來る迄安置してあつた。

▽妙峯山開廟・城外西北百三十餘支里にあり、開廟十五日間。北京附近娘々祭の隨一である。こゝの祭では特に走會と云つて茶會、獅子會、秧歌會などそれぞれ隊を組んで押しかけるので、格別のお祭り騷ぎを呈する。開廟前になると北京の街中にも豫告の報單（ビラ）が貼出される。目下時局柄もあり參觀を遠慮されてゐるが、去年は市民のために和平門外琉璃廠に臨時の出開帳があつた。今年も多分ある筈。

十四日（舊四月八日）

▽天寧寺開廟・廣安門外にあり、開廟一日。こゝの十三層塔は立派である。尙この八日は浴佛會と云つて一般に佛敎の寺では祭をする。

▽天仙廟進香・西直門外にあり、祀

二十四日（舊四月十八日）

▽北頂（碧霞元君廟）廟會・德勝門外土城の東北にあり、娘々を祀つてゐる。開廟一日。日用品、農具の市が立ち、廟も餘り大きくないので田舍びたお祭氣分をかもす。

▽東頂廟會・東直門外にあり、娘々廟である。開廟一日。

二十八日（舊四月二十二日）

▽宛平縣城隍廟開廟・地安門外にあり、開廟一日。道敎の寺で城隍神を祀つてゐる。小廟であるが賑ふ。

* *

〔雜事〕

▽浴佛會・釋迦の聖誕日で（舊四月八日、新五月十四日）各寺廟では讀經してお祭する。

▽藥舖減價・舊四月十三日新五月十九日は藥王の祭で、市內の各藥店では一齊に藥の割引販賣をする。貼紙を出した店頭に人集りを見受ける。

▽その他・以上この月は廟會の全盛月で、各娘々廟も次々に開廟され、期間も長いのでピクニツク旁々見物するのも面白い。

又花見の月でもあり、萬壽山、西山、中央公園、北海、隆福寺、護國寺、果物にさくらんぼ、桃、その他。時節の食物に玫瑰餅、藤蘿餅（各花を餡に和して入れた菓子）筍、鮒など。

（斷り書）

本欄もまる一年、今月で終になりました。その間執筆に當つては出來るだけ實地踏査と並行して誤ないやう努め乍ら行屆かず、讀者殊に現地の人々には御迷惑をかけた向もあらうと恐縮に思つてをります。尙今後も心がけて、華北交通會社發行パンフレツト「北京年中行事」改訂版によつて償ふ豫定であります。何卒惡しからず御容赦願ひます。 編者

昭和十五年四月十五日印刷納本
昭和十五年五月一日發行

五月號
（毎月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局資料課 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 君島潔
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房 振替東京六四二三番 電話九段(33)一四一五番 三三四四番

一册定價 三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

●廣告取扱
大阪市西區京町堀上通一丁目二五
一手取扱所 一新社

Munaval
-NISSEN-

寄生性・瘙痒性 皮膚病治療劑

ムナバール「日染」

NISSEN



ムナバールは化學的に合成したる有機硫黃化合體ヂメチル・ヂフエニーレン・ヂスルフイドにして皮内に滲透して强力なる殺虫作用を發揮し、同時に優秀なる止痒消炎作用を呈する理想的皮膚病藥なり。

【特徵】
一、用法簡便且つ無害・無刺戟にして何等副作用を伴はず。
一、嫌惡すべき臭氣なく且つ衣服類を汚損することなし。
一、品質純良にして約二六％の硫黃を含有す。

【適應症】
疥癬・頑癬・濕疹一切・白癬・水蟲・面皰・汗疱・陰囊頑癬・皮膚化膿疹・傳染性膿疱疹・皮膚瘙痒症其他寄生性及瘙痒性皮膚諸疾患。

【包裝】
一〇瓦（瓶入）
二五瓦（〃）
一〇〇瓦（〃）
五〇〇瓦（罐入）
一〇〇〇瓦（〃）

製造元 日本染料製造株式會社 大阪市此花區春日出町

發賣元 株式會社稻畑商店 大阪市南區順慶町二丁目

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十五年四月十五日印刷納本　昭和十五年五月一日發行（毎月一回一日發行）第十二號

腸疾患に

ビオフェルミン

整腸・殺菌・消化

……を併有する乳酸菌療法劑

整腸作用

腸内の腐敗及び異常醱酵を防止し腸機能を調整して、下痢症狀を安全に消退せしむ。

殺菌作用

腸内の有害細菌を殺滅し、毒素の吸收を防ぎ、腸内を清淨ならしむ

消化作用

澱粉並に蛋白質を消化して、榮養分の消化と吸收を促進し、便通を調整す。

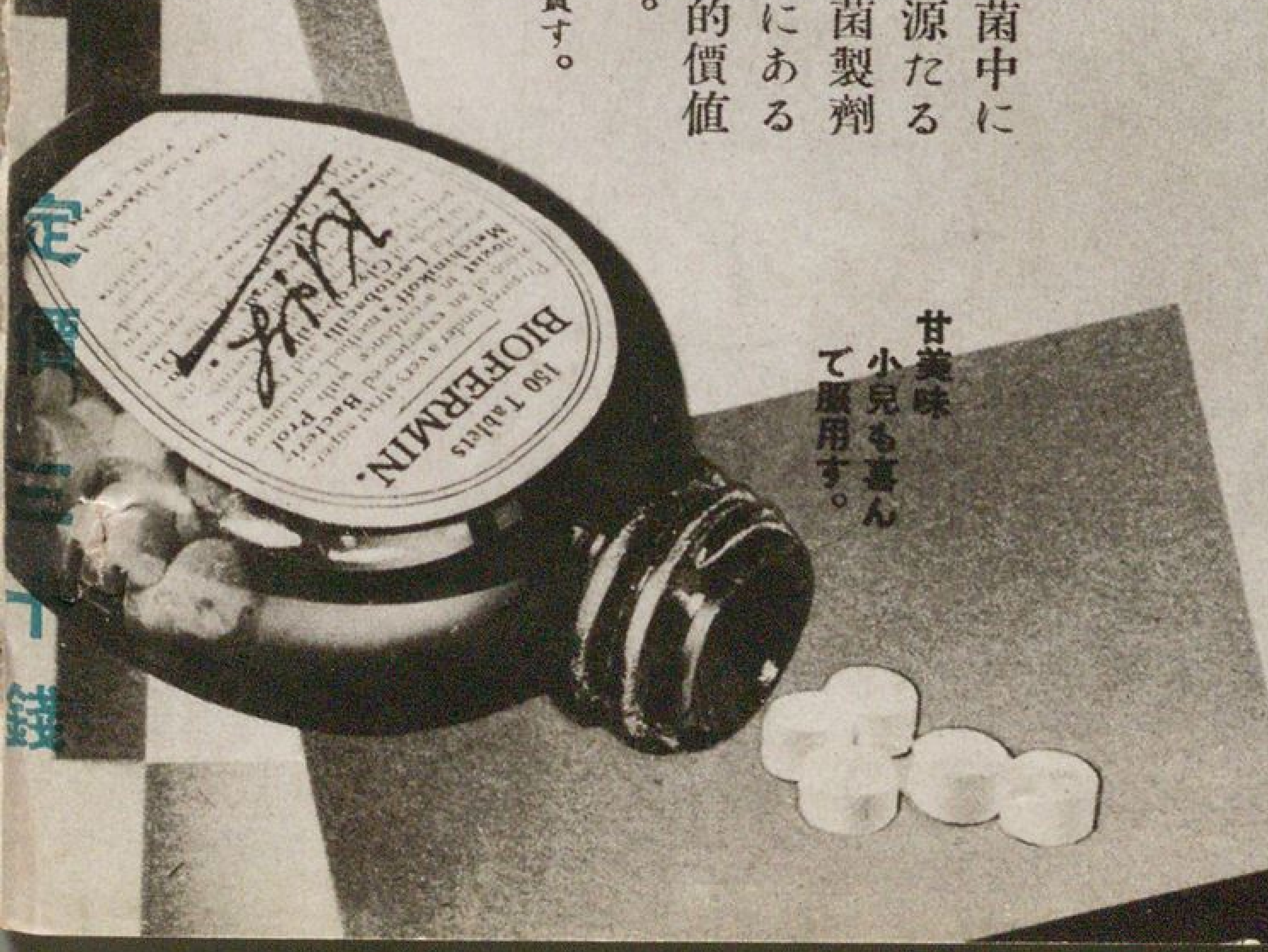
【適應症】 急性及び慢性腸カタル、醱酵性下痢、消化不良、鼓腸、常習便秘、小兒下痢、乳兒綠便、脚氣、老衰症等の治療と豫防。

フラビン發見の始祖

ビオフェルミンの主劑たる乳酸菌中には發育促進素にして、細胞賦活源たる**フラビン**を多量に含有す。乳酸菌製劑に於けるこの發見は特に生長期にある乳幼兒に對する治療的並に榮養的價値を一層重要視せしむるに至れり。

著名大病院 醫院御採用

粉末と錠劑あり、知名藥店に販賣す。



甘美味 小兒も喜んで服用す。

發賣元　大阪市道修町　株式會社 武田長兵衛商店
製造元　神戸市二番町　株式會社 神戸衛生實驗所

定價三十錢